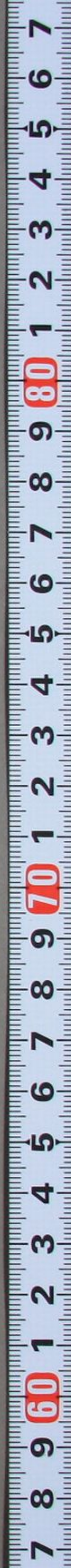




圓光大師傳

十一十二





法然上人行状畫圖第十一

諸人の歸依ありし中に九條の園白殿下

兼實公号後法性寺殿又号月輪殿 信仰ありしに崇重比類ありま

二月十九日法性寺殿乃法忌日より佛事ありたる

に傳供せし僧俗座を分りて立たりしに今日に

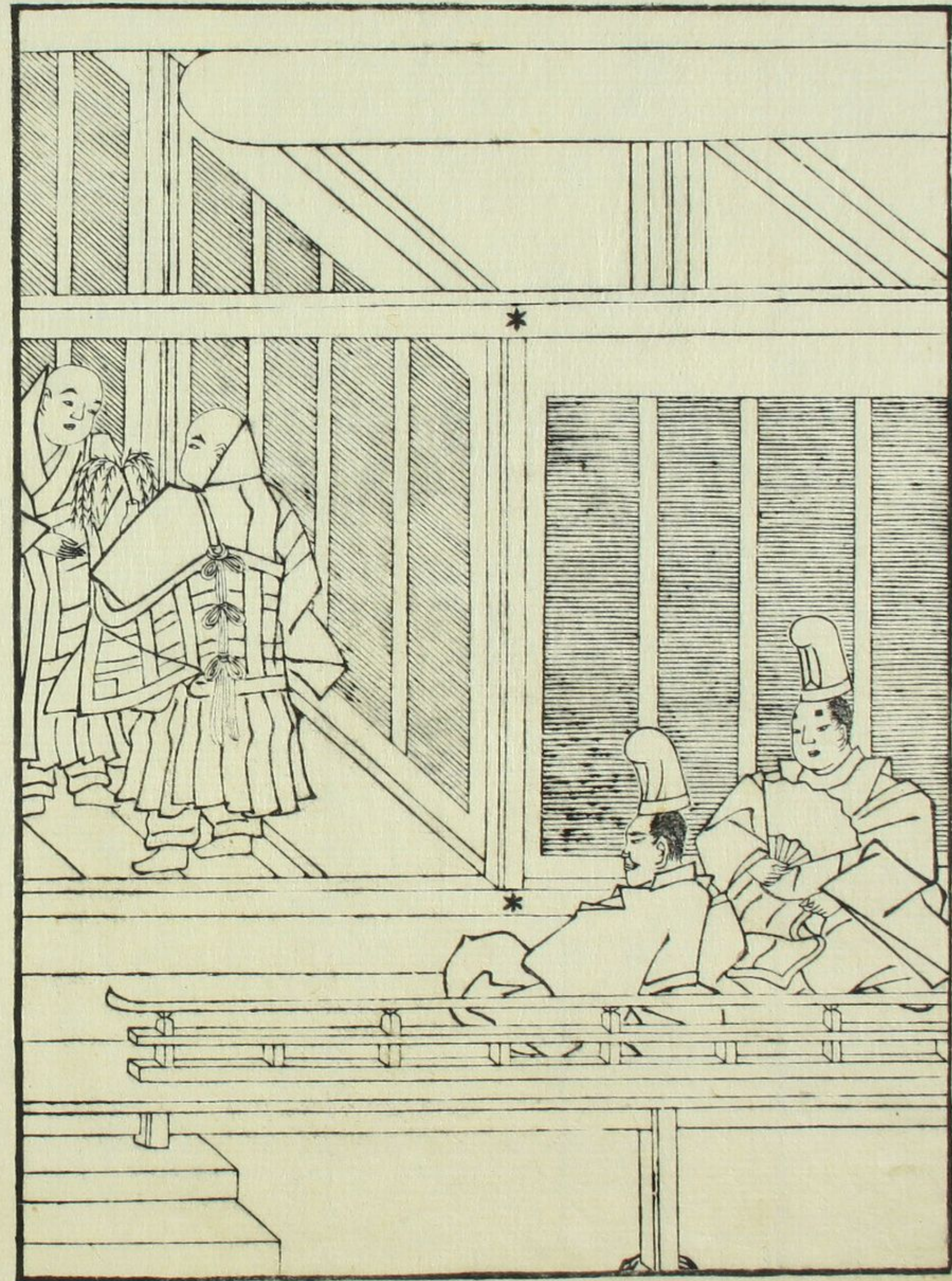
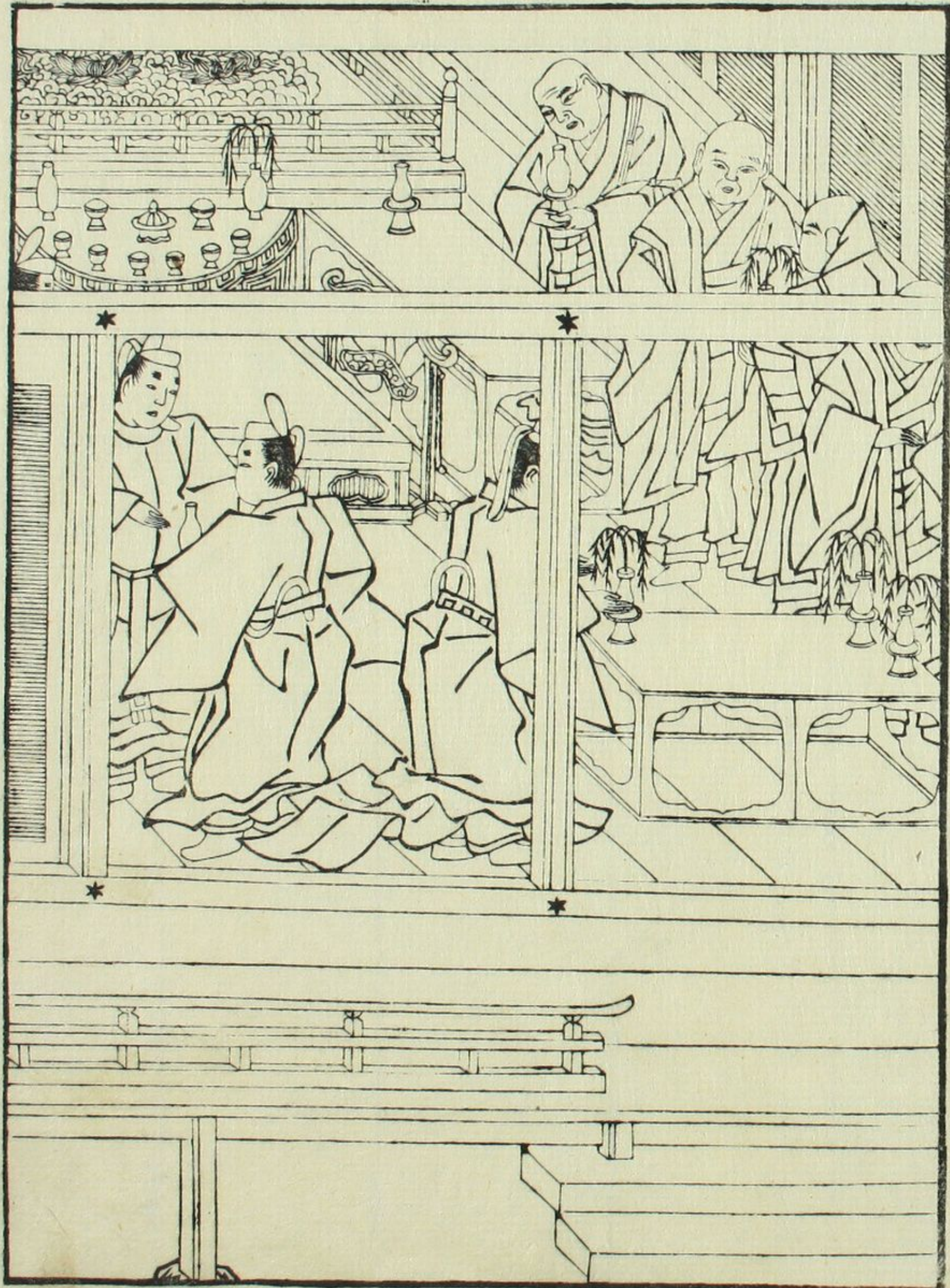
てに祈りしありし佛事あり上人を傳供よと立

給ふしと殿下おほせしありき神人松殿基房公まつのま

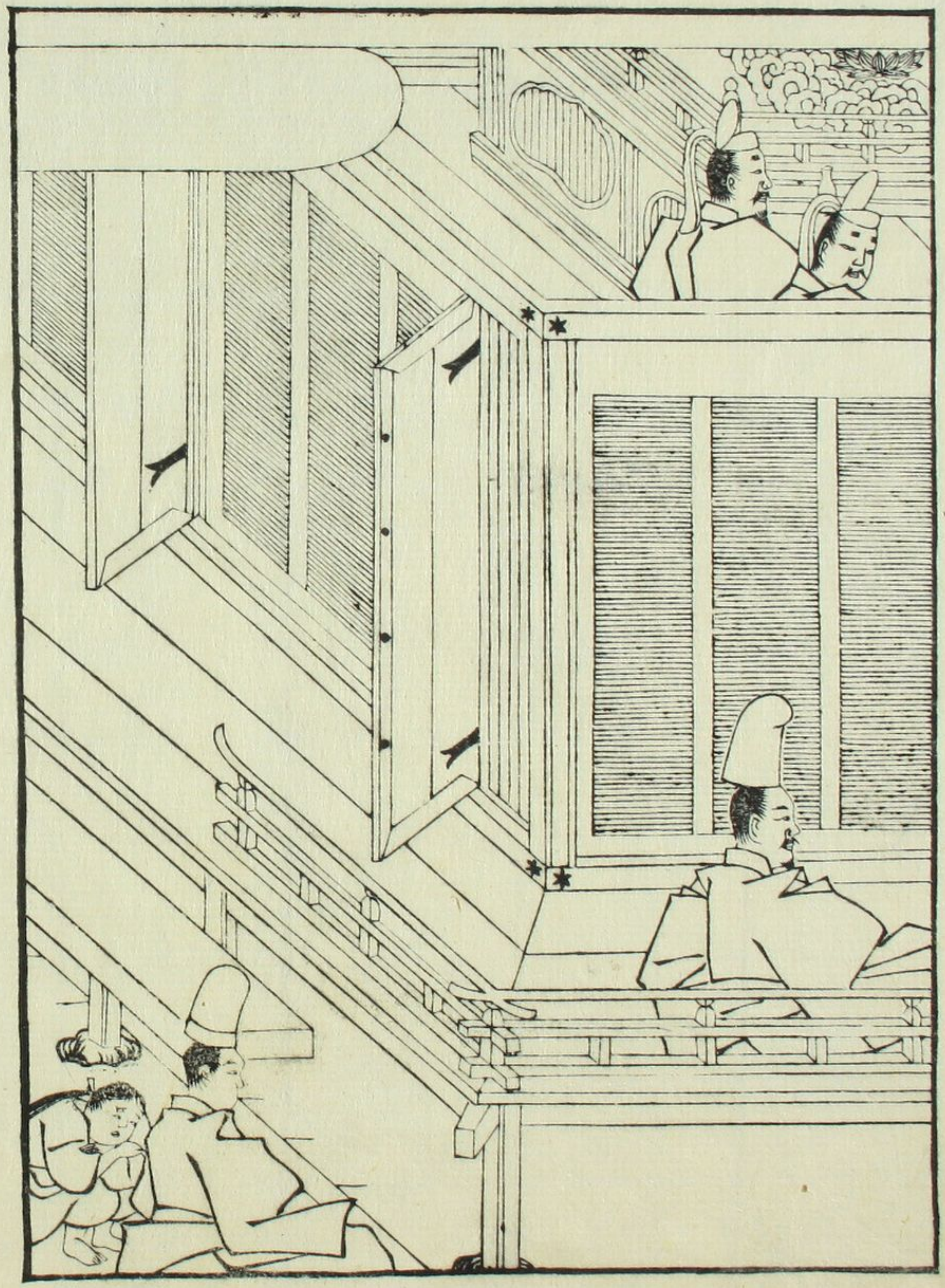
こととて祈りしと申給り上人のゆゑ隱遁の身なる

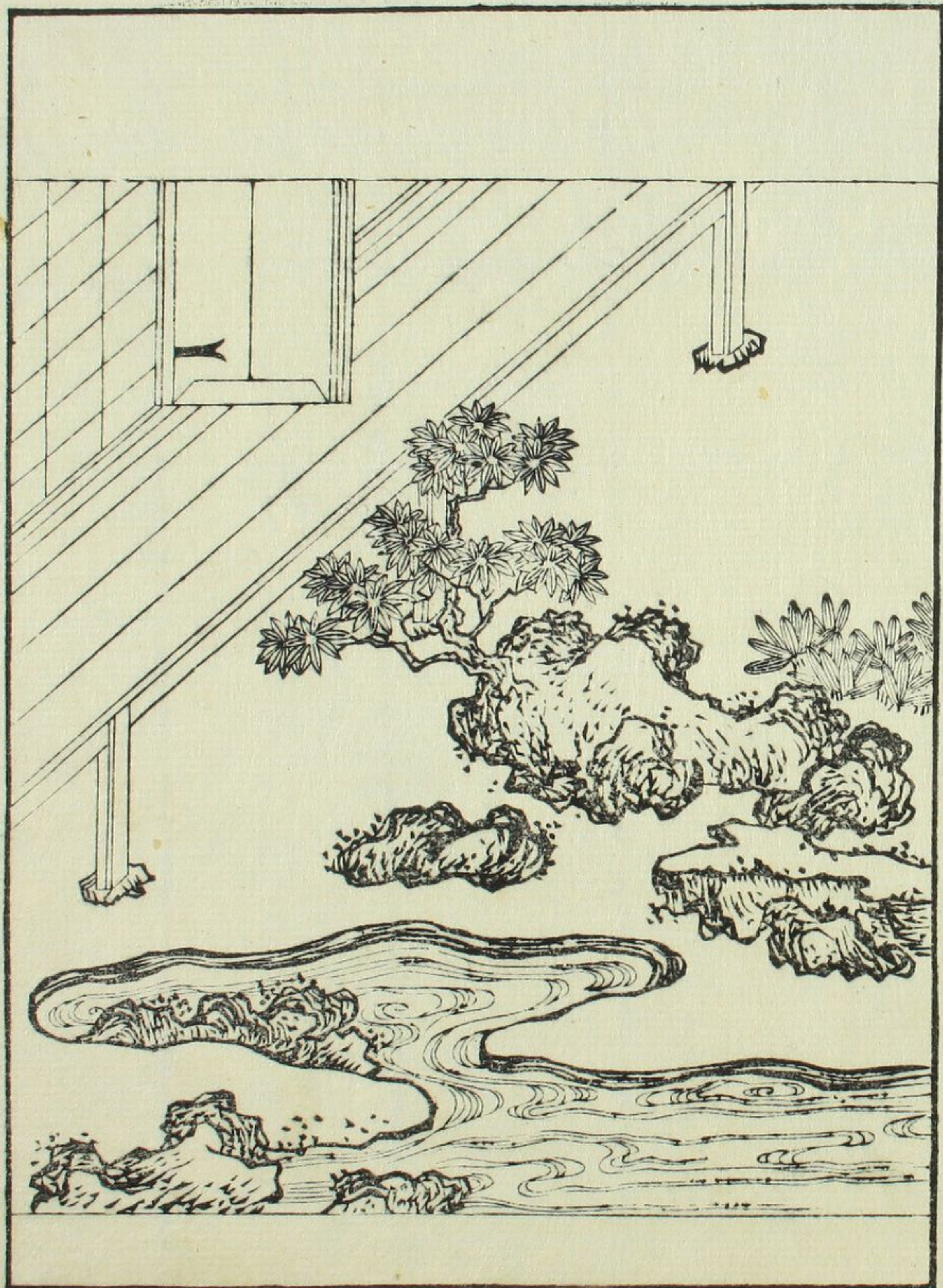
うへ九僧くわうそうよておいするに。慈鎮和尚じしんわう于時しよ受戒じゆかい乃師し
 範はんに怒いかりて。と人を座ざとりひきし。され
 きれん。菩提山ぼだいざんの僧正そうじやう圓えん信しんあるくと座ざ改かへゆつり
 ちんもたつたまふ。と人ひとを僧正そうじやうのよよまると。松敷まつしきの
 信しんの座ざめくたふ。海うみをるにむいしく僧そうれ一
 座ざありき。道德たうとくのらふらふまゝにさゆる
 うれ



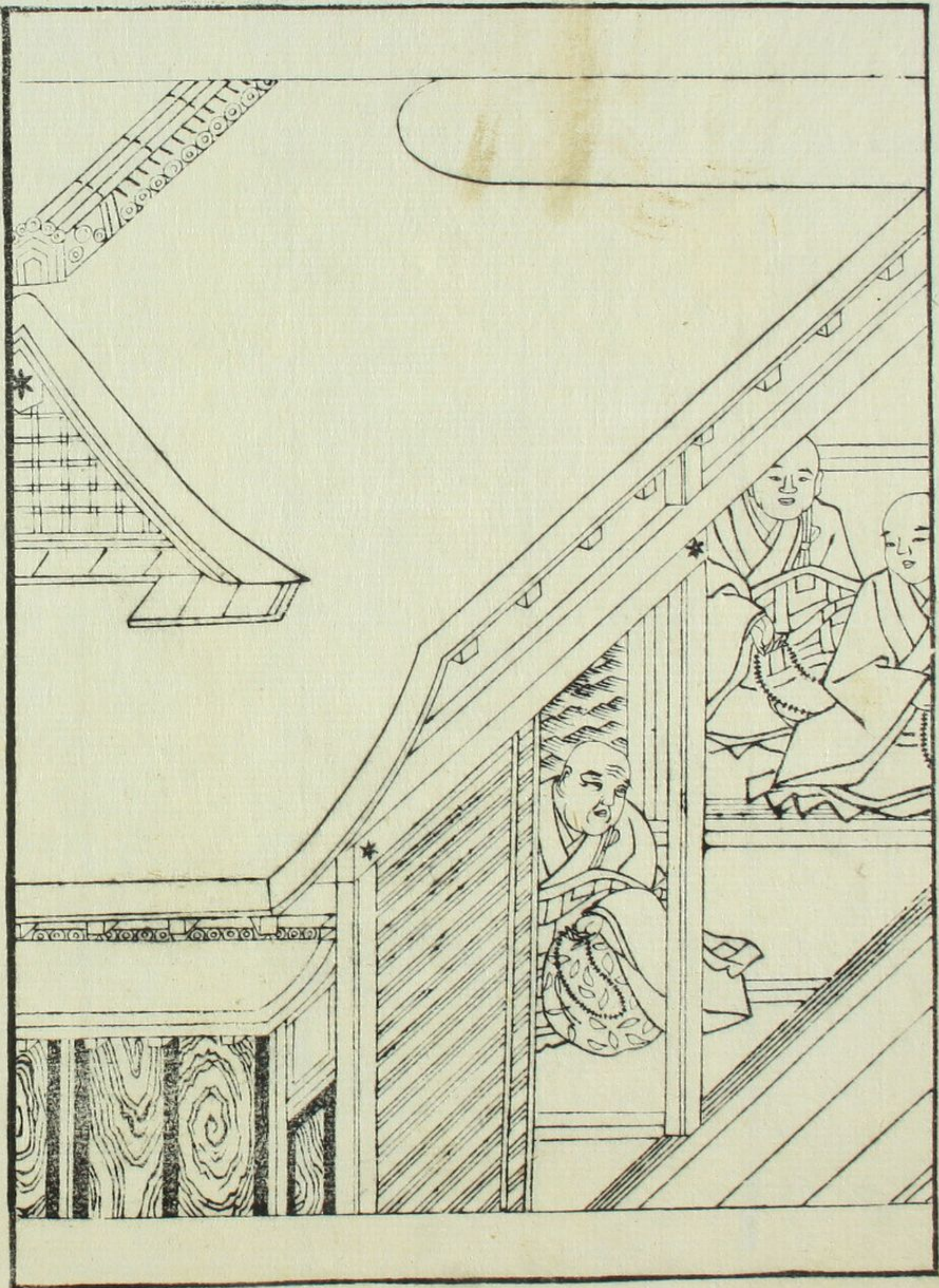


月輪殿をほくく礼堂に例えある屋を一字指圖
 張下されく立ちまわく礼堂に殿下れに所おろく見
 借へとまか依屋いまる見借と源と奉行の三位
 範季御申されまは思食振ありとていそぐせと礼
 堂にまのほくらたてとあり何事れに料よかと
 おもひもやと人のに屋とてと後ありきり老
 者よりありとせとまのほくらとていそぐせあり
 てのちに法對面あるとありとありなるに由依の





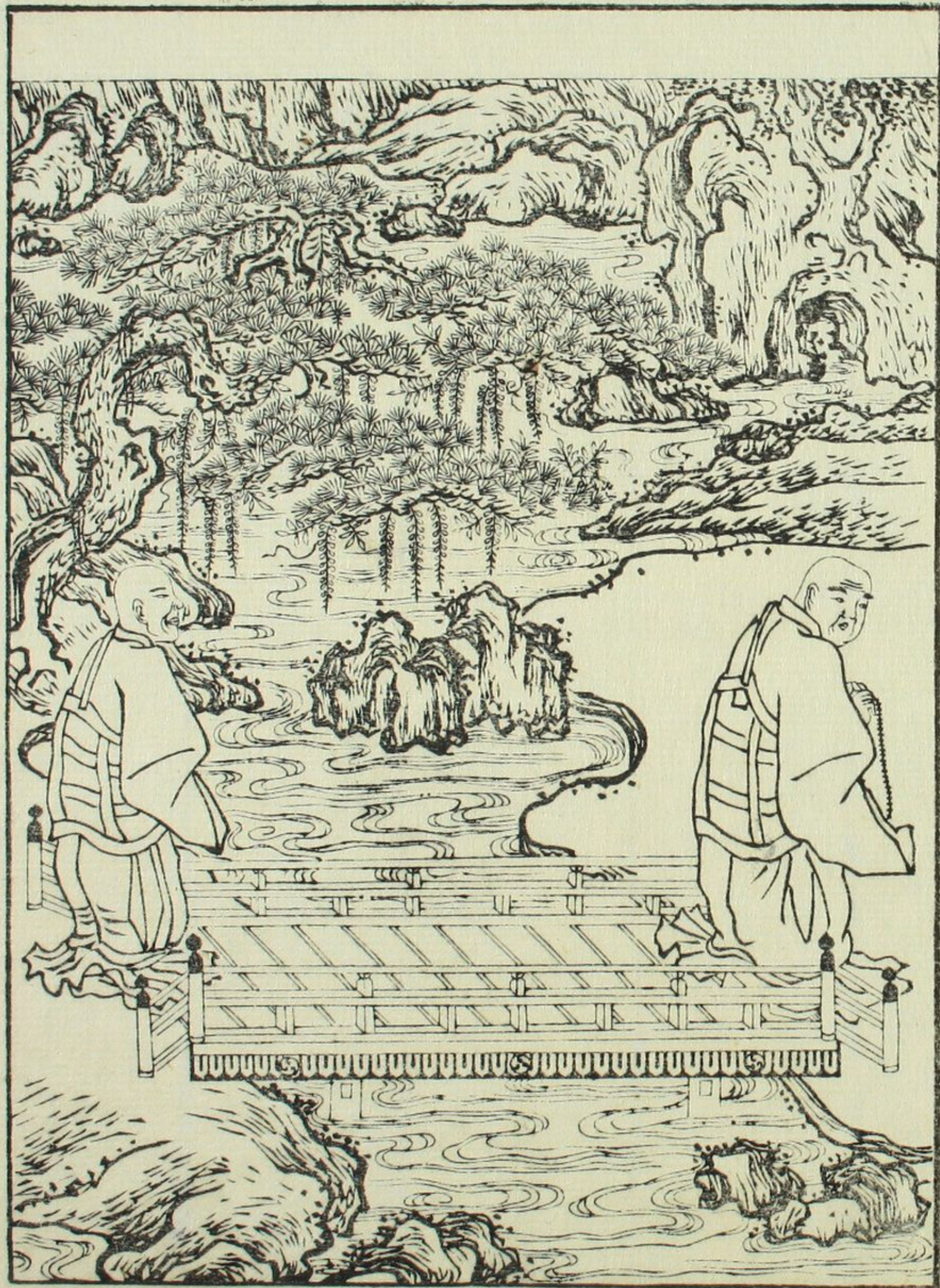
あまのいづれなるのいづれなるをいづれなるいづれなる
あまのいづれなるのいづれなるをいづれなるいづれなる

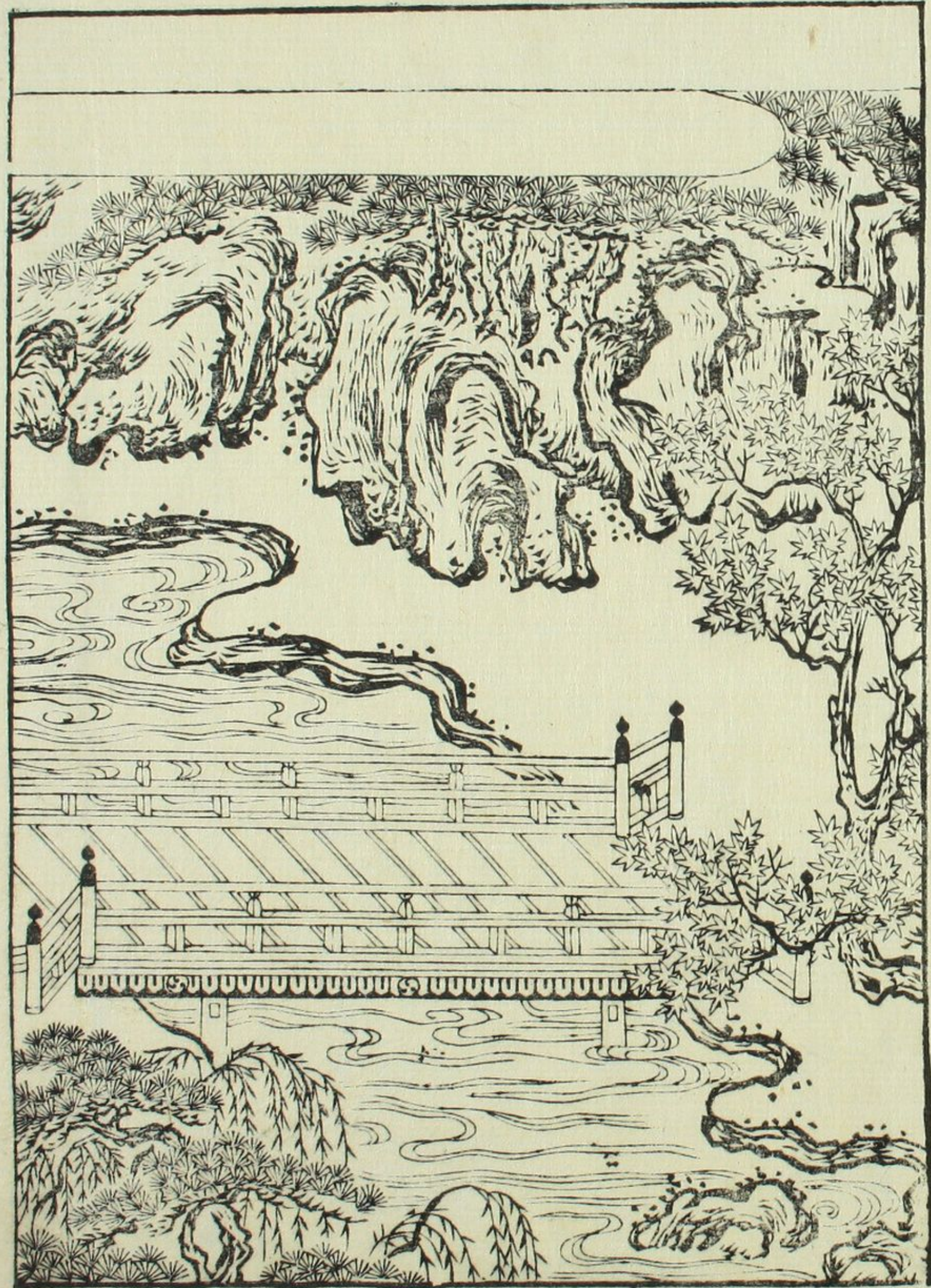


ある時上人月輪殿へ参りて向へは殿下高き
 おておのじつせぬまへに聖覚法系三井の大納言
 僧都覚心おあぐわのじつせぬまへに上人僧
 都をあやしきに見たまふ。聖覚あれの大納言僧都
 の房作と申すはきは僧都よりあへんと覚心と申すの
 里申すは意大納言僧都を世よおはせれん実名
 してこれと申すはまゝとあり殿下加極よ
 きとせたまへんまゝして卿相雲容れおとさへん



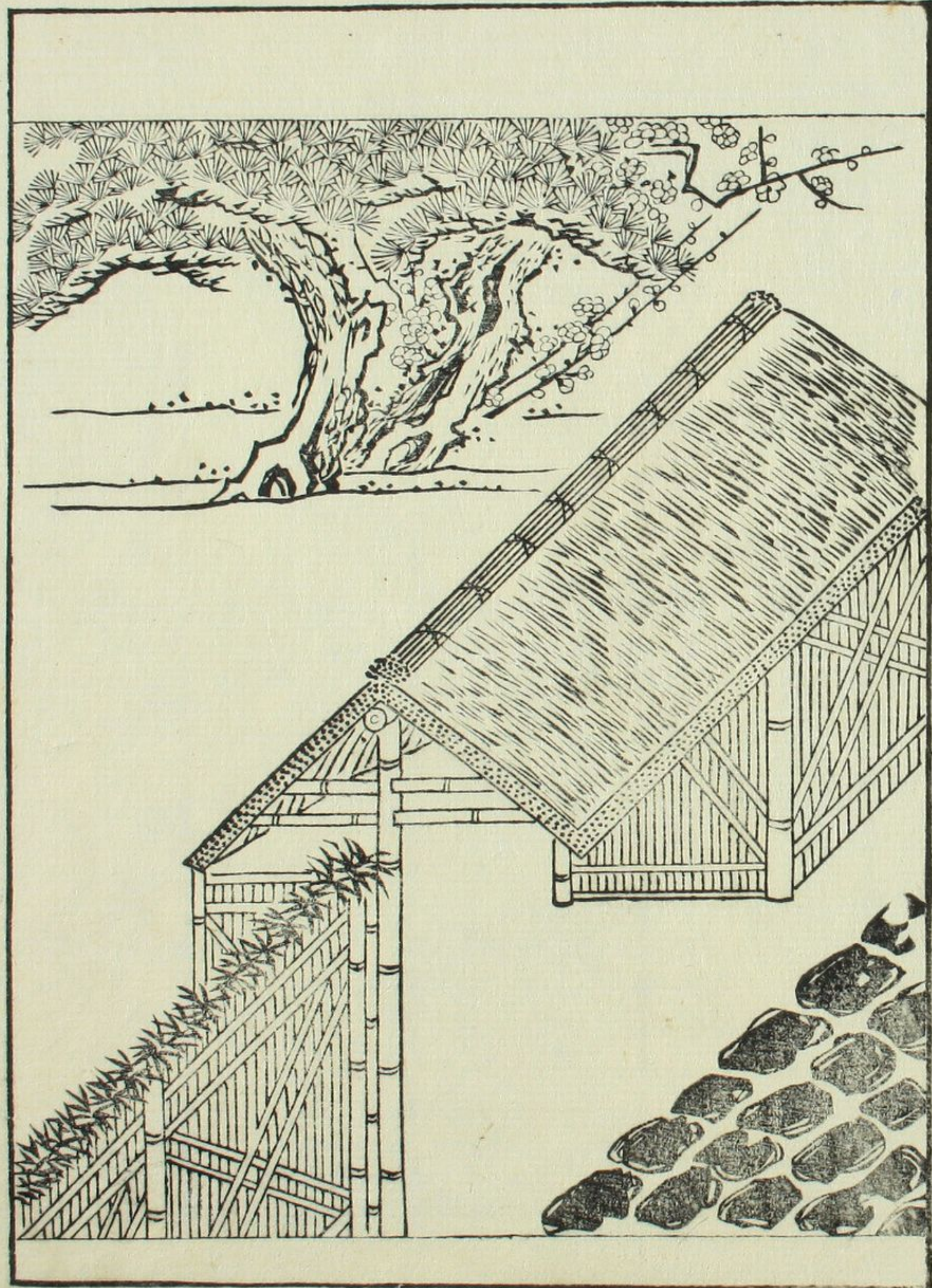
春の夜の静けさ





建久八年上人いづのちやとなまふと仰りたる殿下
 姉くいあけさあのみる程よくほくたくて平愈
 しこまひよきの上人おあき九年正月一日より弟
 よららこもりて別請よたえじれあしほいはらわら
 友名馬つ耐重經を海使うして浄土の法門年来教誡
 を兼るこいよを心腑よたえんごう。要文をほし
 給わらと且の面談よたえと。且の後の海うも
 とたへ侍人といふまきおん。安樂房外記入道を
師秀子

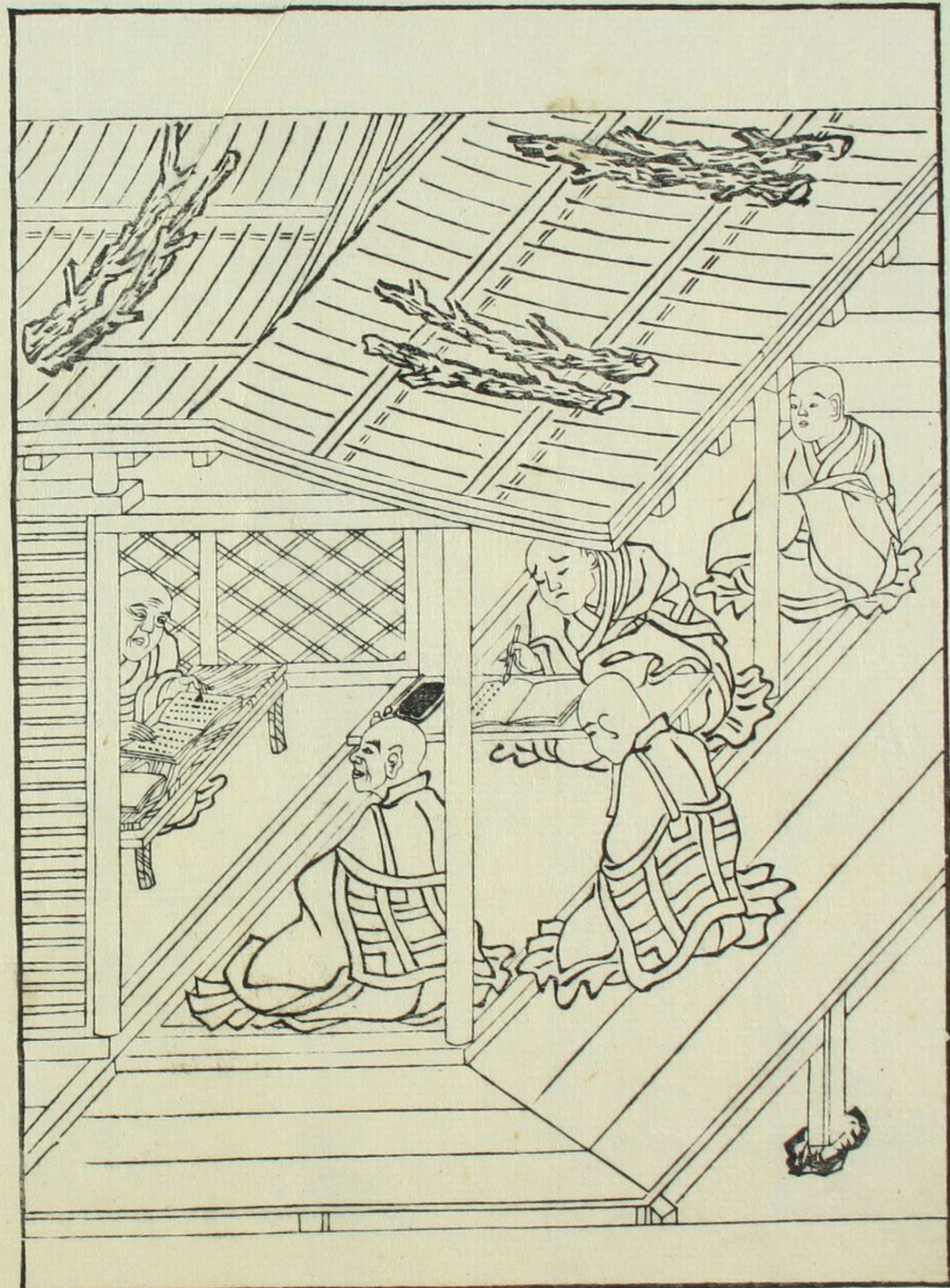
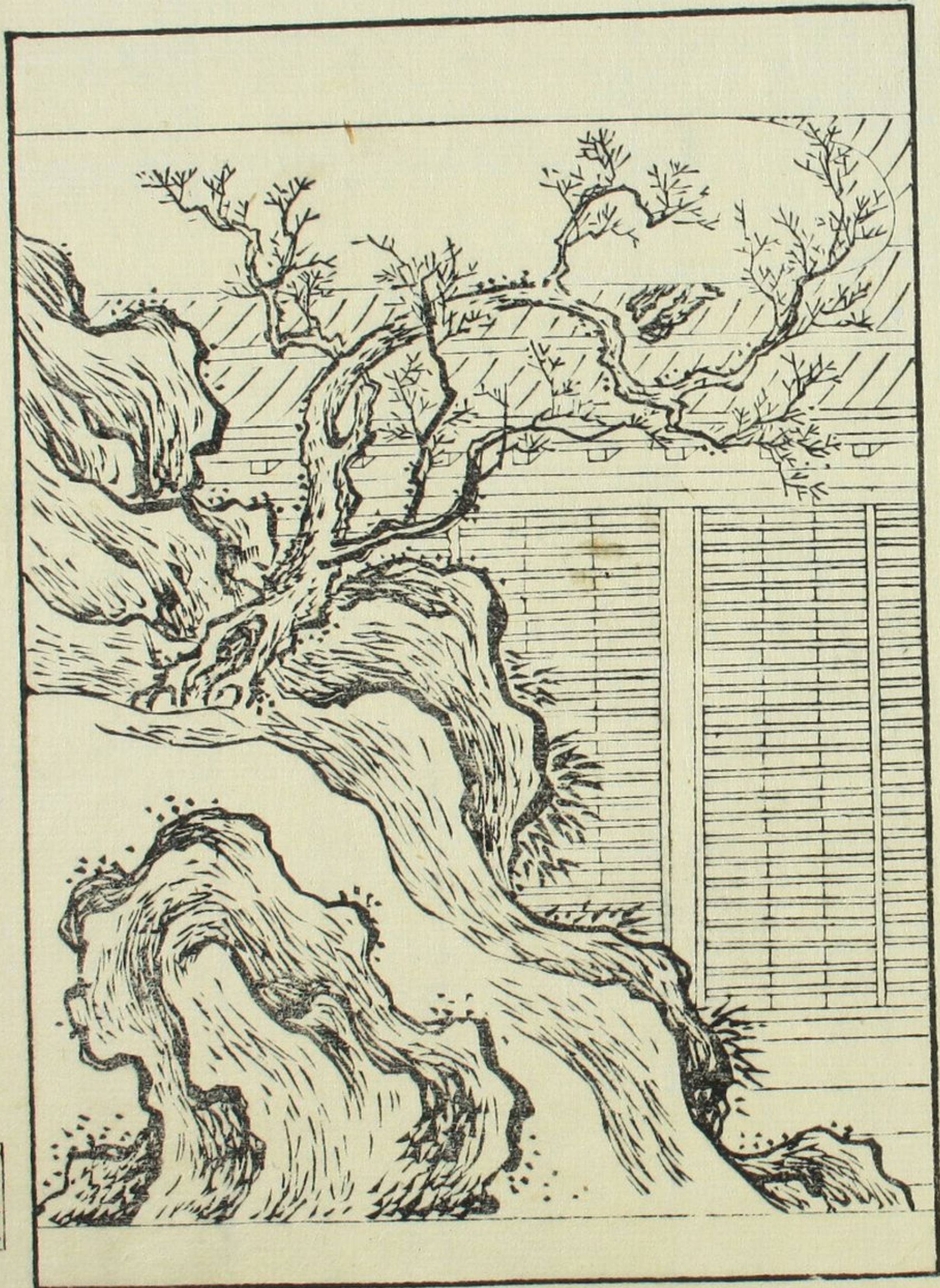
執筆とくく選擇集を選りておるに第三章
 書寫たれ予若筆作の器よたえい。かくれご
 くの會座よまざらと申はるはははて
 こは僧橋慢の心うと志て惡道よ墮りたること
 き坂志りたあつたよらら。其後ハ真觀房感西よん
 書でつれな。此書は選進をてれ後同年五月一日
 上人のあれ中よ善導和尚来應して汝專修
 念佛を弘通ともいへり。殊更よ来れるやうと志め



114

したまふ。此書冥慮よかたふくしきとあはれし
 信

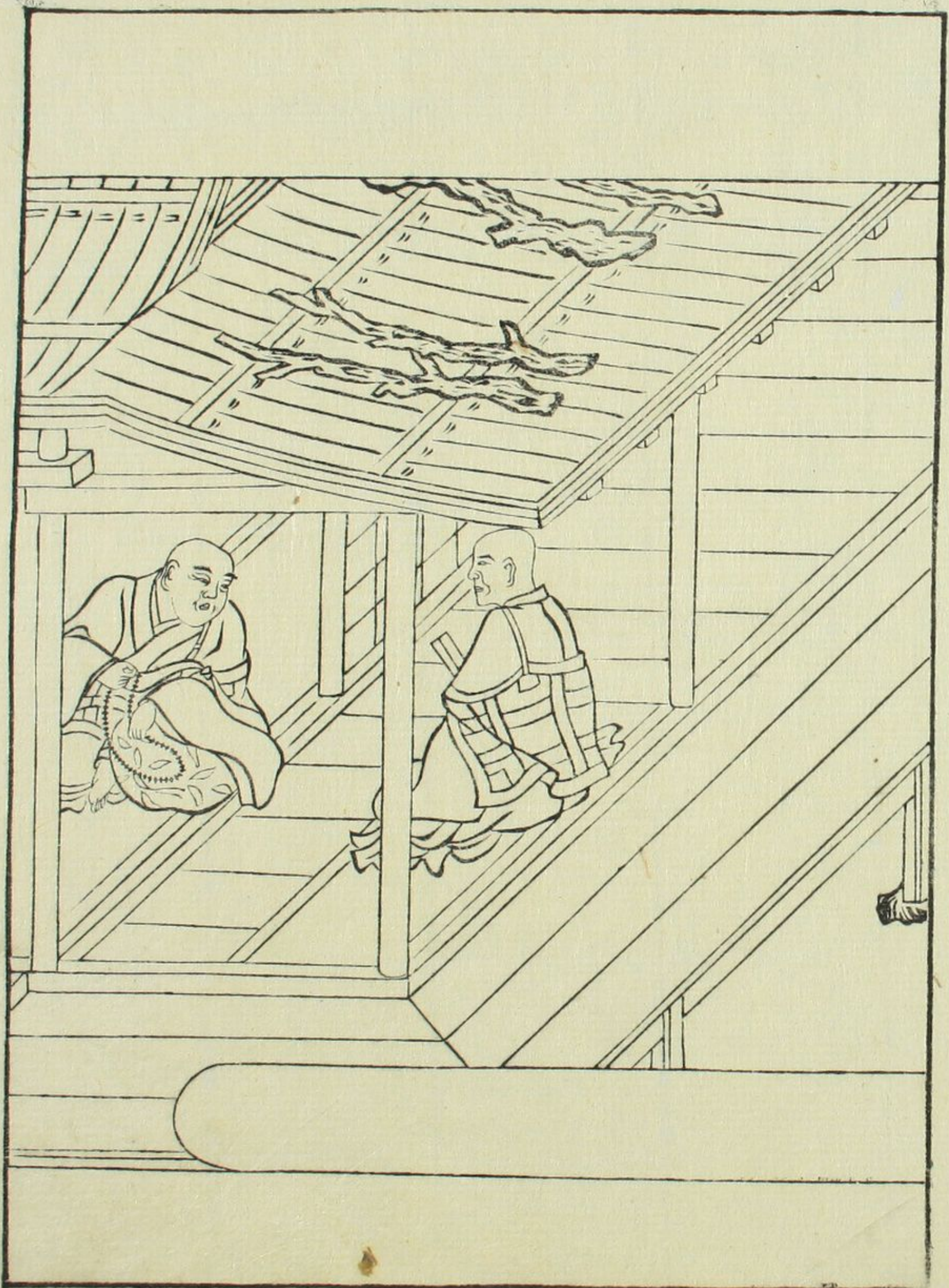
信



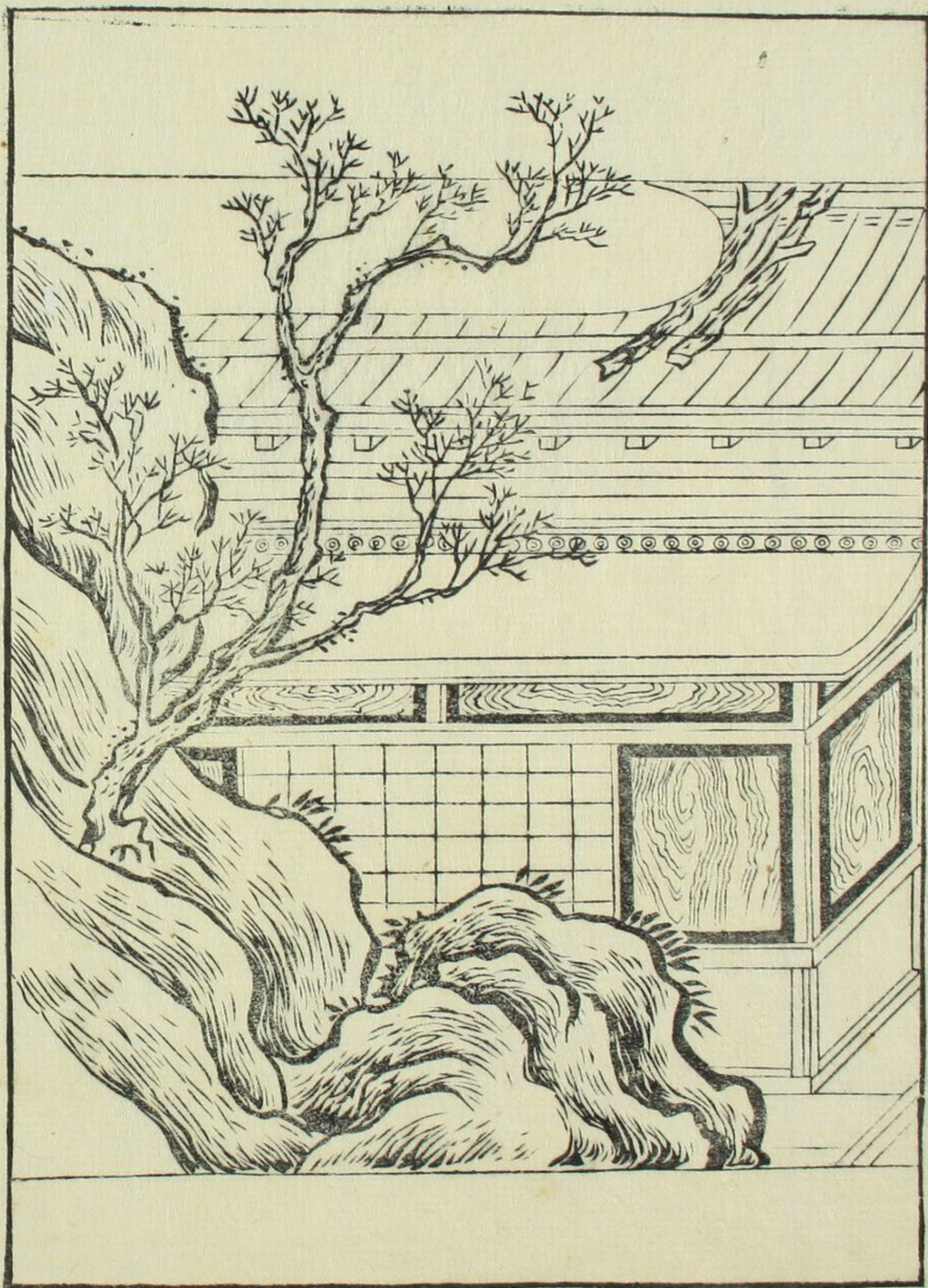
殿下の御儀候あつて御下上人系なまふて殿下
わりのひらせ給へじ。公御殿上人おねわらひごう事候。
上人ごうは事候に思召て九條殿へまいわなまのいけん
ために房務わらうて別請りにをまじき給候。いけ
かへをあらたむまのいけん。殿下まきりに御下
まあらた。たし房務まなりとも。又遠例なまの
侍人ごまき。系給なんやとにまき。おれごまき。おれ
時子細よ及び侍候と申はれ。おれはせめても

請申と此御下。常に御遠例なま。号ごまき。おれ
此上ハ辞申。とら御下。まき。系給。おれ。おれ。
御下。行房心中。ま。おれ。房務。ま。おれ。餘れ。おれ。ま。
ま。おれ。おれ。九條殿へ。の。ま。系給。ま。おれ。おれ。檀越を
魚。おれ。おれ。おれ。おれ。おれ。おれ。おれ。おれ。おれ。おれ。
おれ。おれ。おれ。おれ。おれ。おれ。おれ。おれ。おれ。おれ。
九條殿へ。ま。おれ。おれ。おれ。おれ。おれ。おれ。おれ。おれ。
おれ。おれ。おれ。おれ。おれ。おれ。おれ。おれ。おれ。おれ。

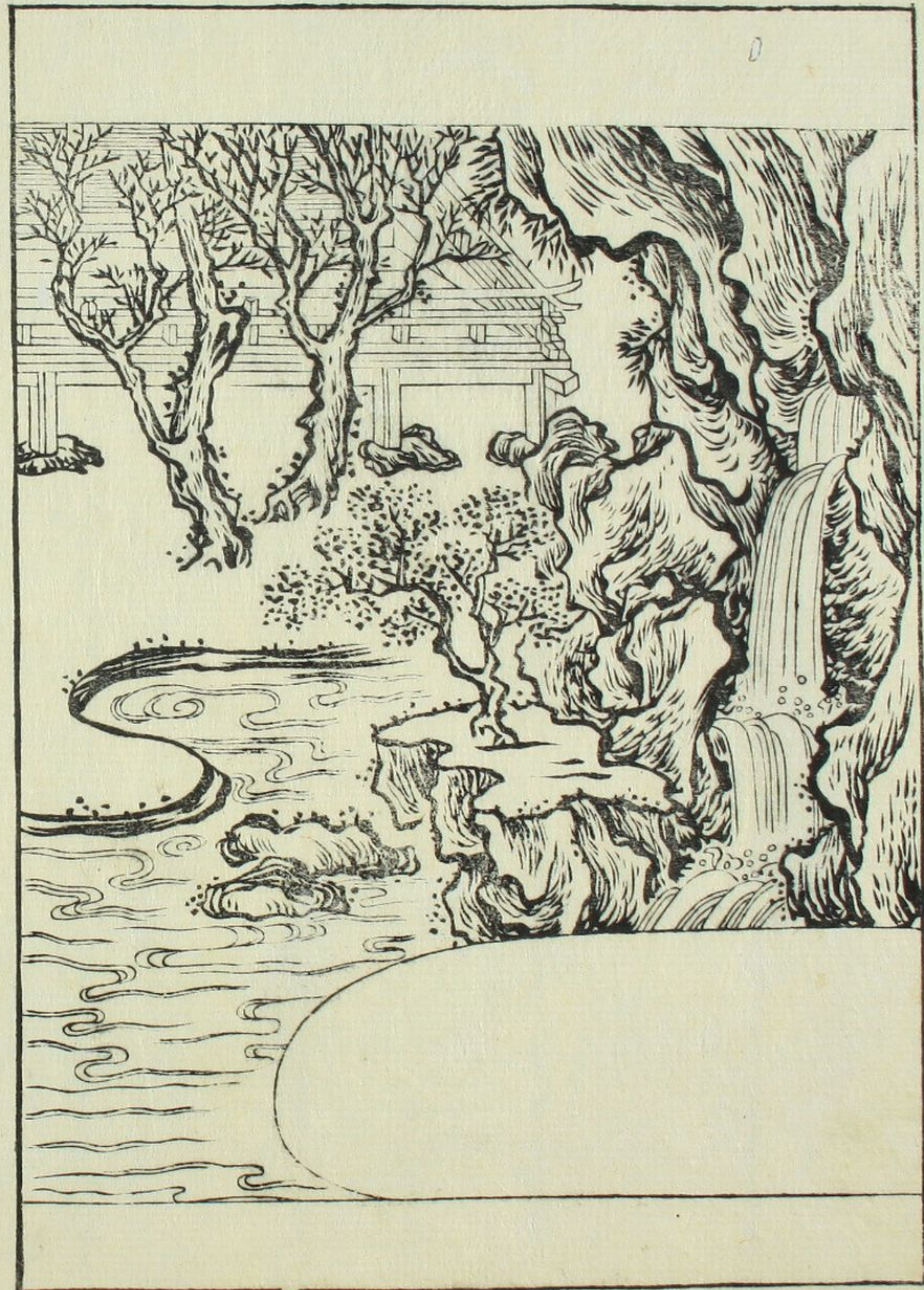
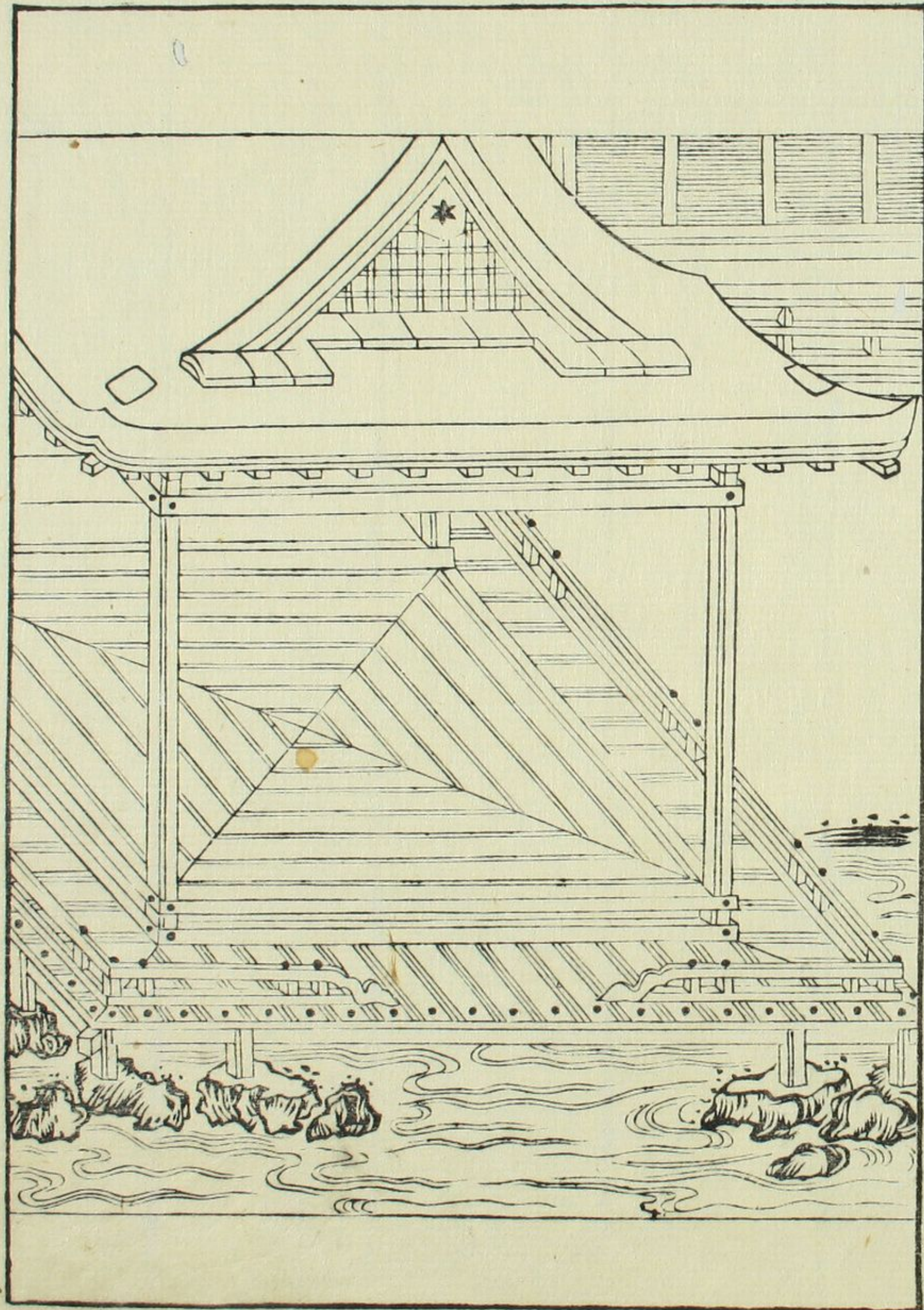




我ら^{せんしゅう}は先生^{せんせい}に因縁^{いんえん}あり。餘人^{よじん}は准^{じゆん}どへ^いく^はく^は宿習^{しゆくじゆく}
づの^まある^ま事^{こと}候^{まう}ま^まつ^まつ^ま浪^{なみ}志^しの^の謗^{ぼう}と^との^の心^{こころ}を^をた^たか^かひ^ひの^の言^{ことば}入^いりて
罪^{つみ}を^をう^うへ^へま^また^たり^りと^と信^{しん}じ^じる^ると^と身^みの^のや^やも^もた^たり^りの^のち^ち上^{かみ}へ
こ^この^の申^{まを}候^{まう}語^ご申^{まを}者^{もの}れ^れど^どけ^けり^りと^とぞ^ぞう^う。先生^{せんせい}に^に因^{いん}縁^{えん}
あり^{あり}事^{こと}なり^{なり}と^とその^{その}言^{ことば}を^を傳^{たづ}ふ^ふ依^よ他^たり^りあ^あら^らず^ずなる^{なる}ほど^{ほど}ま
ま^まに^にあ^あら^らず^ず事^{こと}に^にあ^あら^らず^ず候^{まう}ぞ^ぞに^にあ^あら^らず^ず候^{まう}

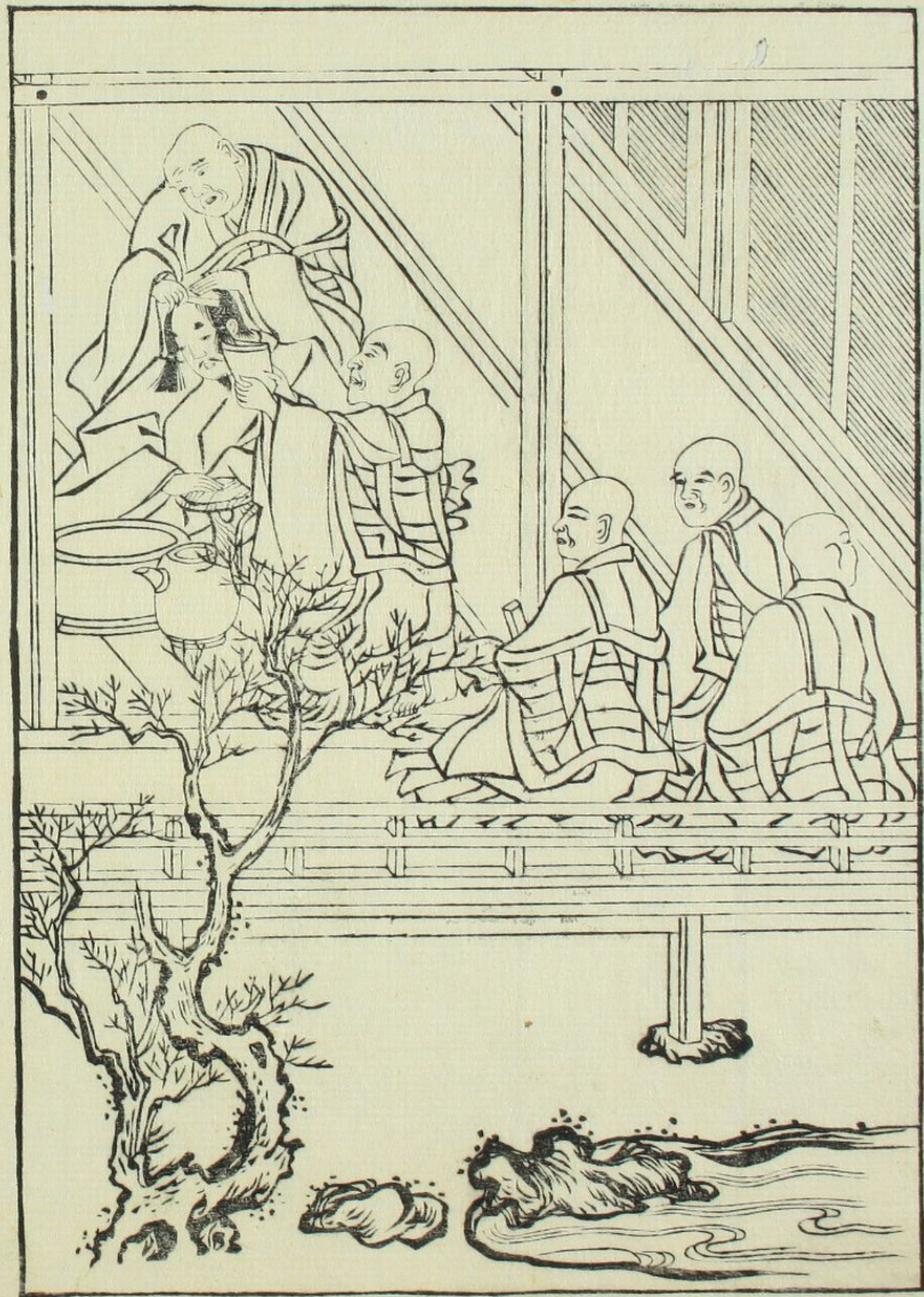
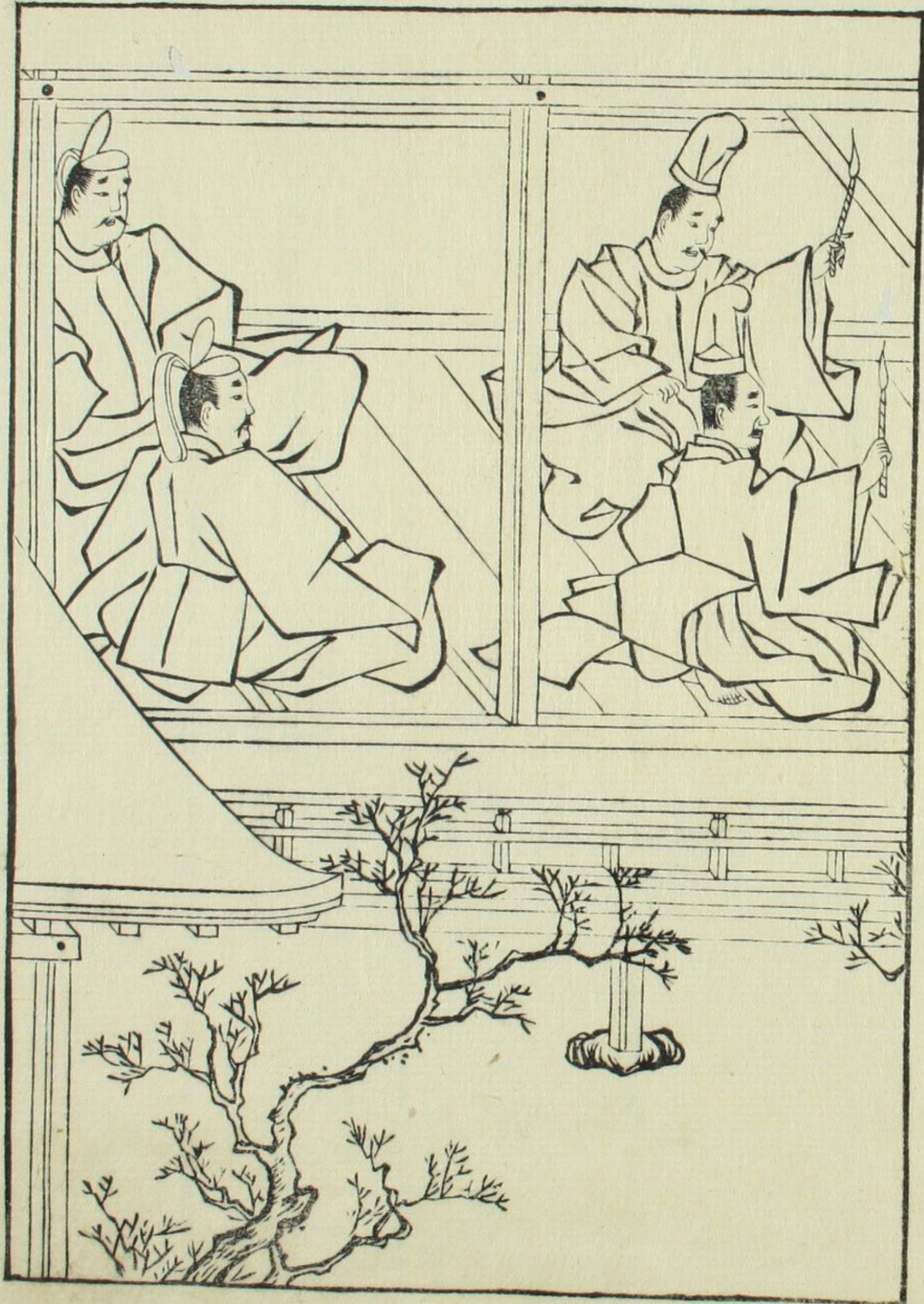


殿下ひらへり念佛門よ入強みのちは。浮生ふせい乃榮えい
 耀えうをかろく志く。往生浄土の海ひたそ他事たじかろ
 里さとき。法ほつわよ建仁二年正月二十八日月輪殿げんみく
 御素懷ごそくわい法名ほつめい圓證えんじょうをこけれる上人じゆんじんを和尚じゆんうて圓戒えんがいを
 受持じゆし。高橋たかはし後ごますくゆりり里さと寺じ利り



山崎

山崎



法然上人行狀畫圖第十二

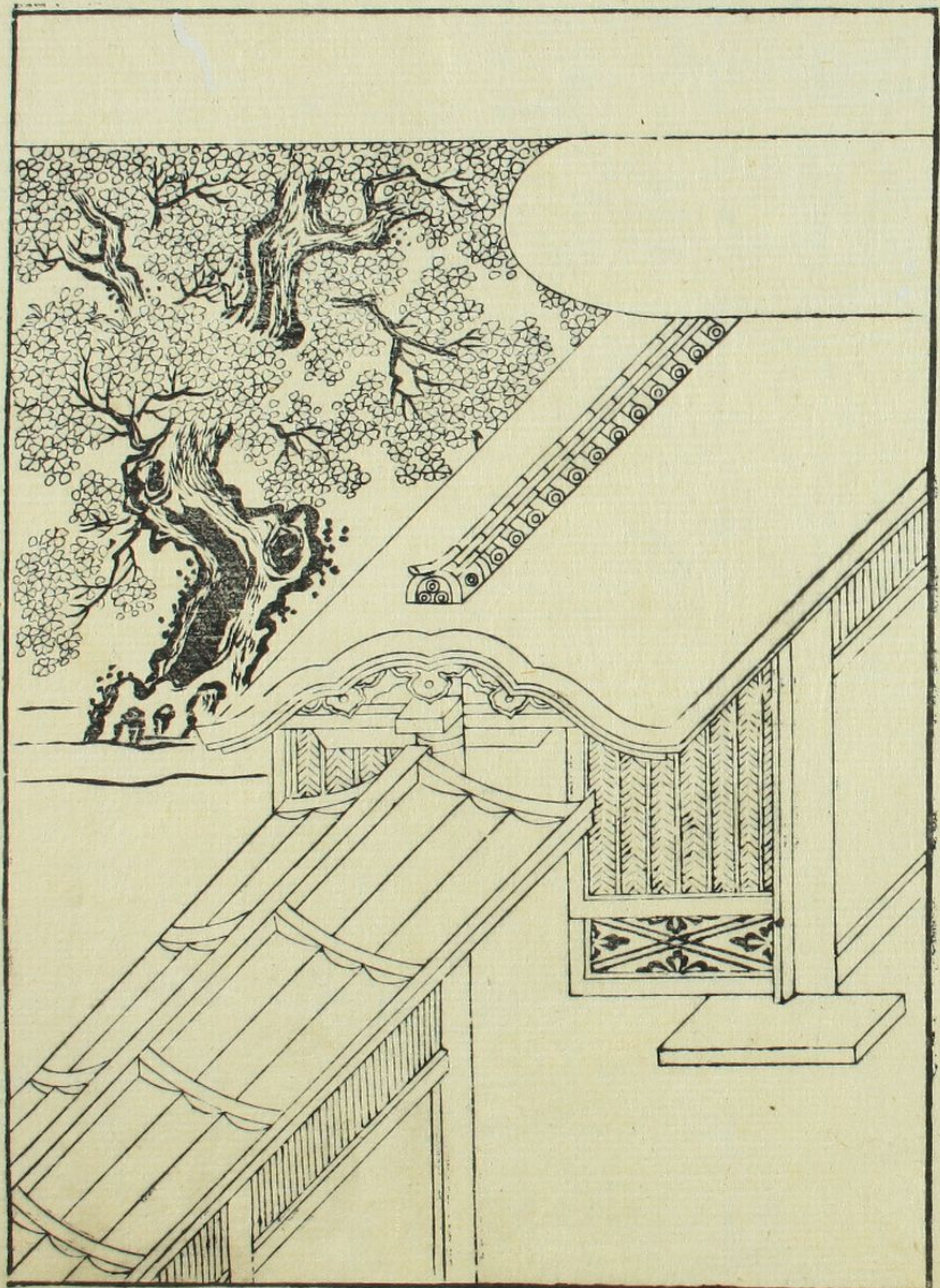
大炊御門左大臣ねほいのみかど 経宗 所ところ勞あはれ此こゝ時ときある人ひと乃すなは方便べんぽう少すくく。

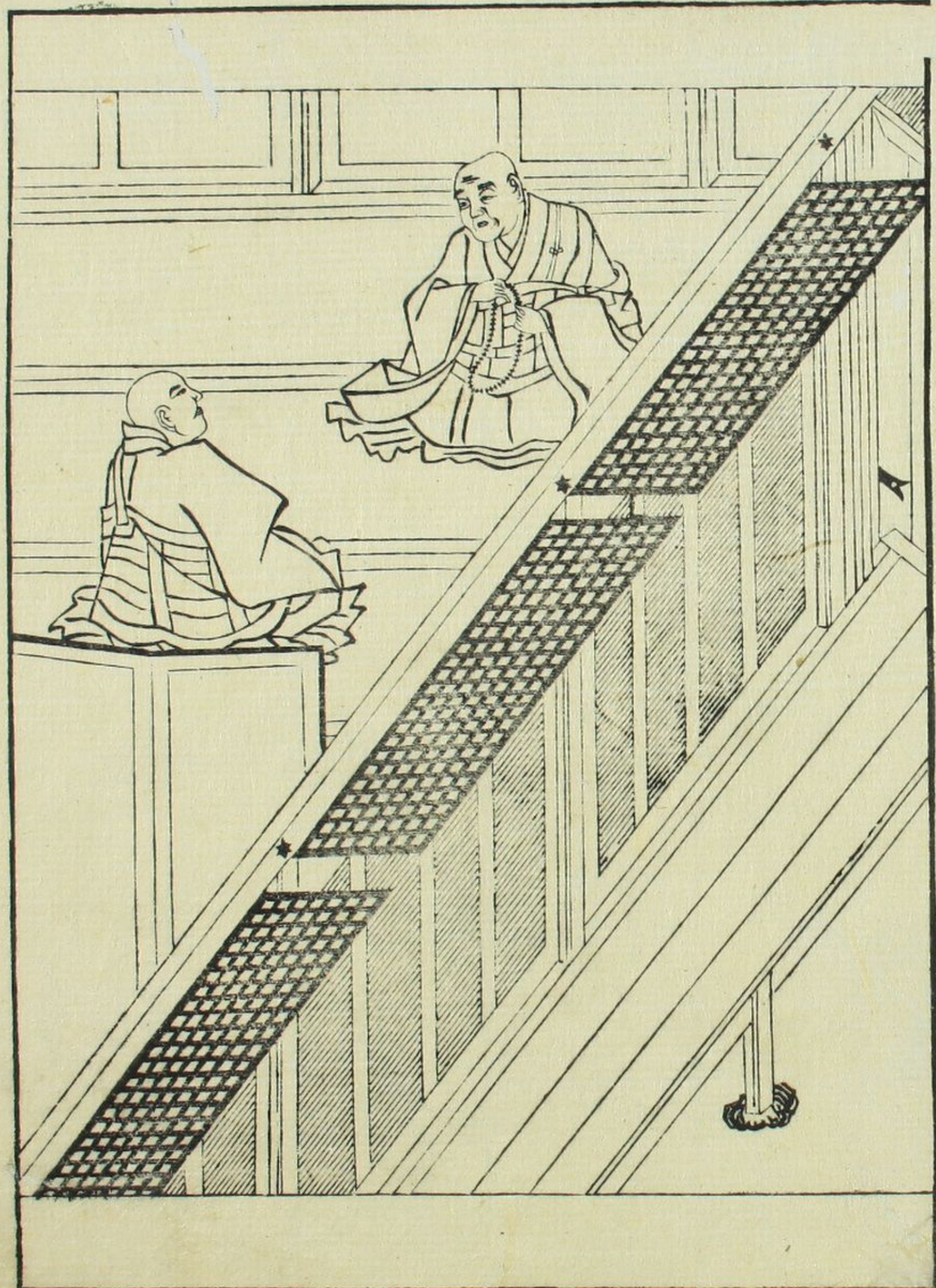
上人じゆんじんを知識ちしきし請こゝろし申まをし此こゝ所ところを念ねん佛ぶつ往生じやうじやうせしむる日ひ比ひしと沙さ汰たよよをよめ人ひとをた右みぎ行ゆきく勸すす進しんせしむ

中ちゆうとありさほある人ひとを此こゝ所ところに上人じゆんじんのふかりしむる屏びやうぶ風ふうを為なしむる。ある僧そうとたすよとたす法はう門もんをた

ほせし此こゝ所ところより。天皇てんかう晨あした旦あした我われ朝あしたより佛ぶつ法ぽうの傳でんはる次第しだいなどゆりしむら此こゝ所ところに念ねん佛ぶつ往じやう生じやうせしむる代しろ

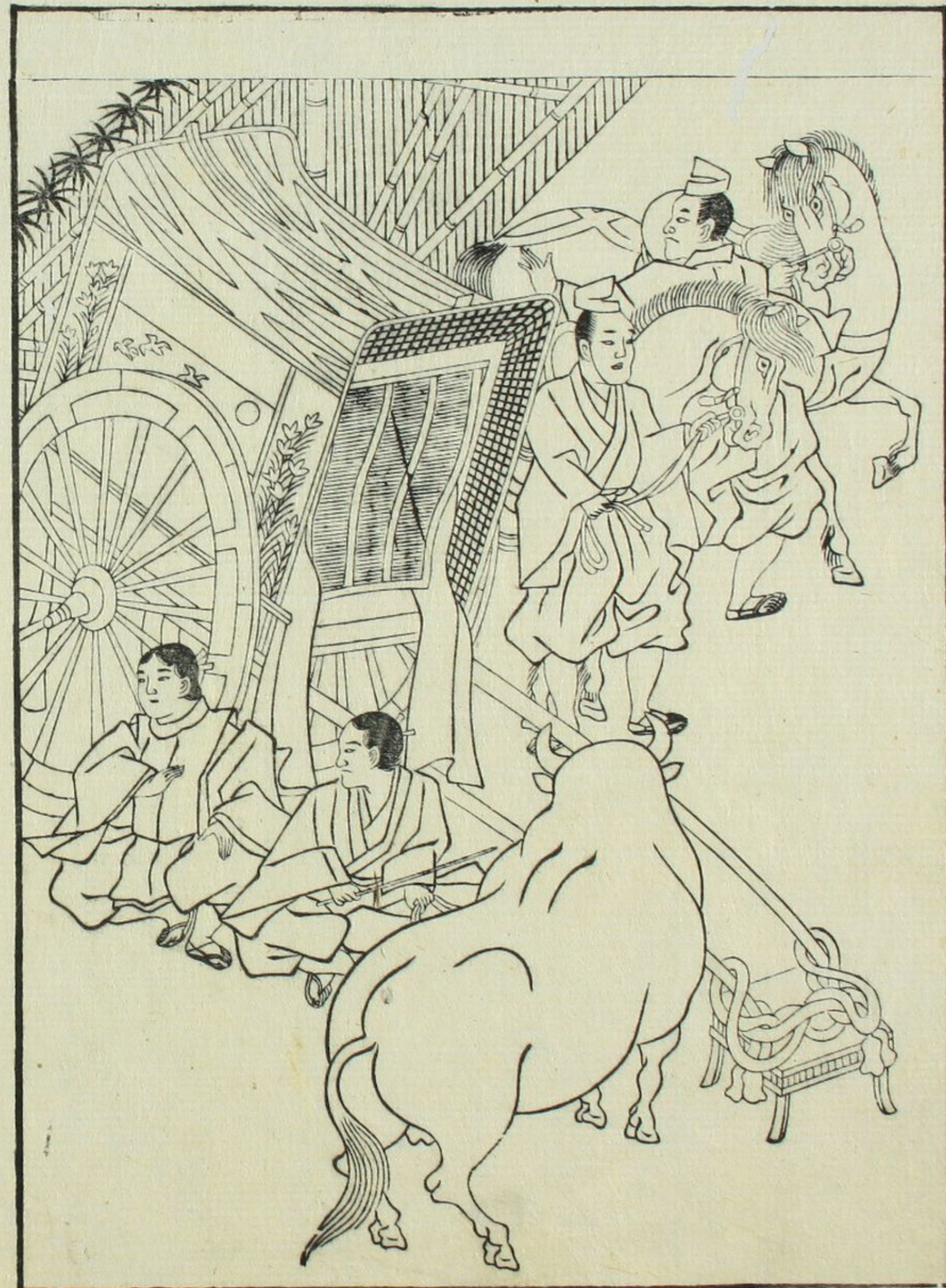
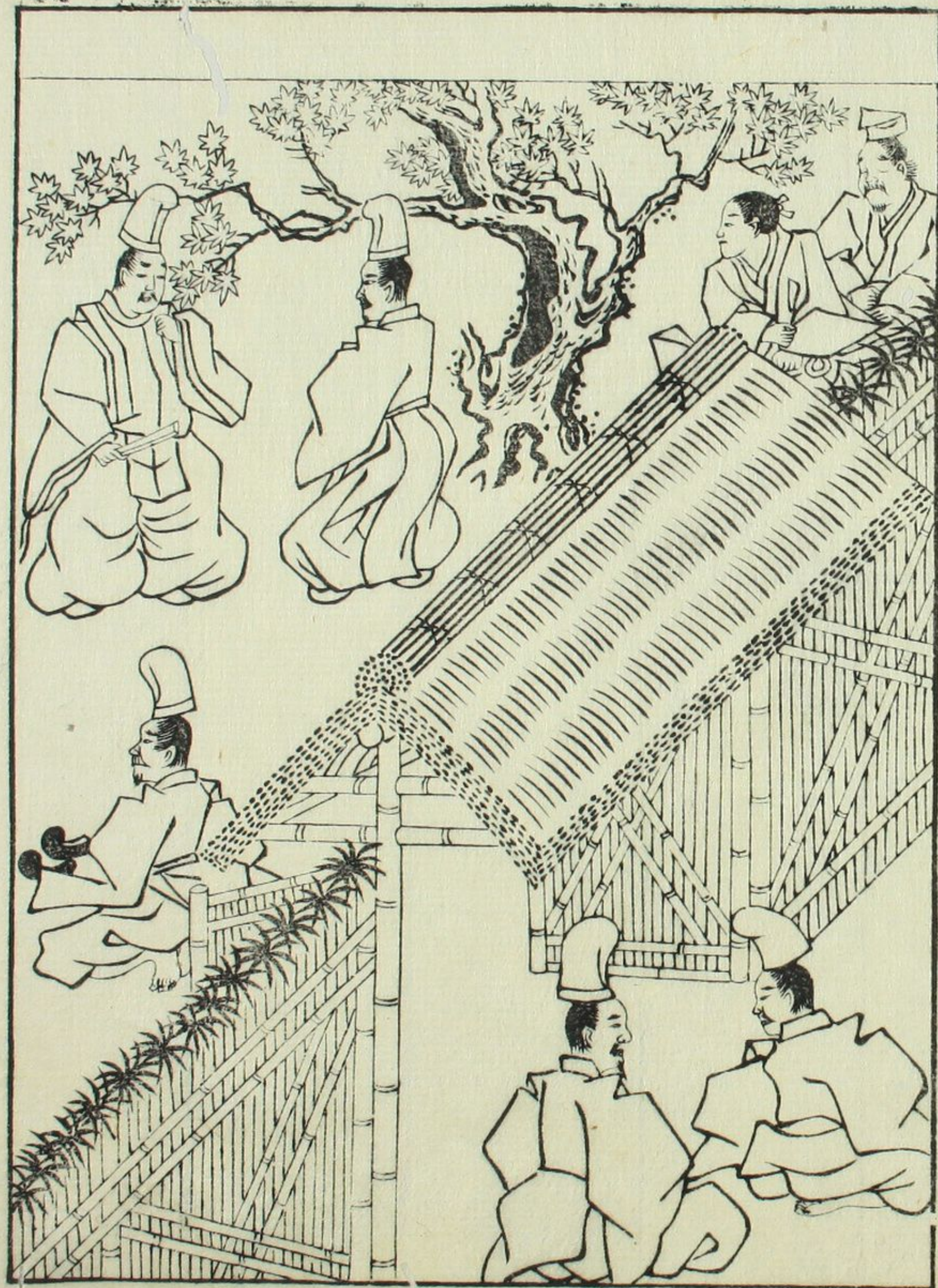
相應さうをりれ法ほふなる事ことなるに宣えん説せつし給たまふた存ぞん
 一ひととらよその勸くわん化けよ志しこひ歸き敬けい他たよこられし
 生なま年ねん七しち十一じゅういち文ぶん治ち五ご年ねん二に月げつ十三じゅうさん日出い家けををけられ
よあり法ほふ名な金こん剛ごう覺かく為な寛かん平へい法ほふ皇こう御ご名な之の由よし
在あ在あ茂も申まを間ま命いのち終は之の後のち改かへ法ほふ姓せい覺かく 亦また勞ろう次じ弟ていり危あや
 急まじれ間ま同どう二に十じゅう七しち日にちより上かみ人ひと系けい住じゅう一いつ念ねん佛ぶつををこ
 め申まをす所ところ聖せい日にち辰ちん尅く條じょう終は正せい念ねんりして往むか生せい後ごとけ
 給たまふ上かみ人ひとののこゝろをを備そなへててあそむるる所ところ

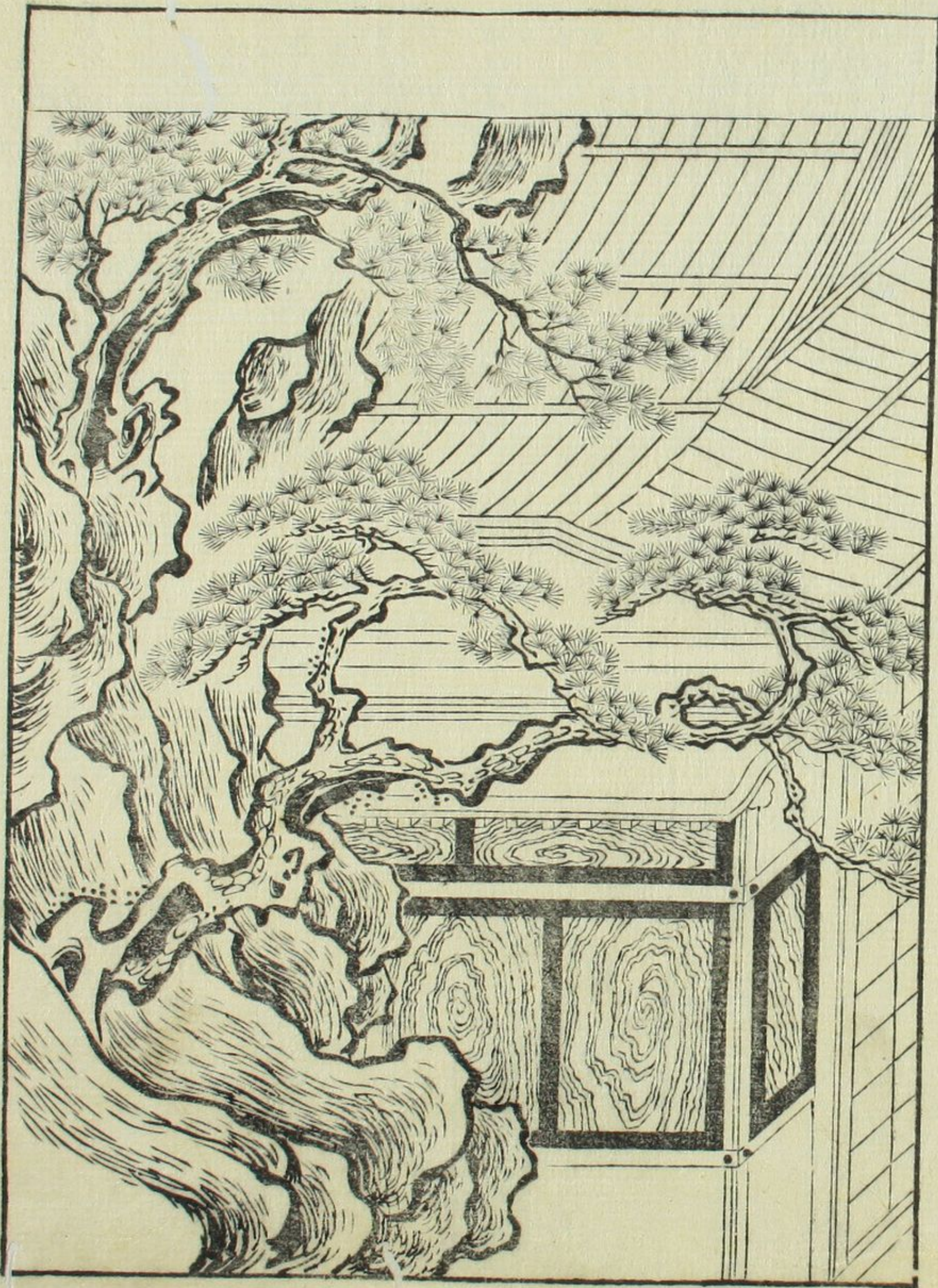




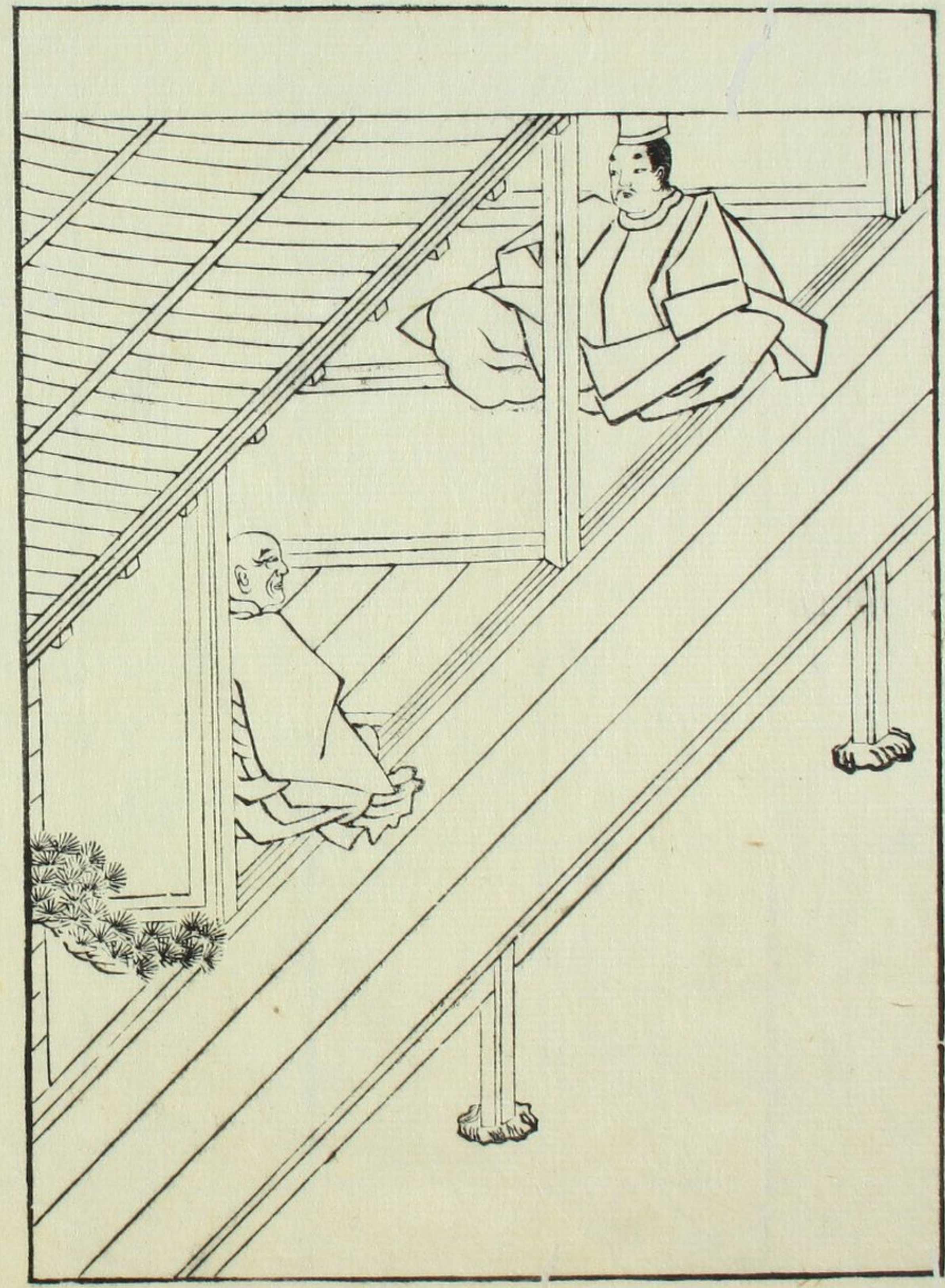


花山院くさんのわんの大住兼雅公公は、あつく上人上人よ歸きしなほいて鎮ちん
 西庄園せいじょうえんの土貢とこうをわらして毎年毎年よ施入せにゅうせしむる。我
 は院内院内よりほりい車くるまたてをりて、あつく上人上人も法然ほねん
 上人上人乃庵室いんしつよ車くるまもりて、あつく上人上人は、あつく上人上人のま
 とくは、あつく上人上人より給たまて。圓頓戒えんどんがいをうけ念佛ねんぶつの法
 門もんを談えんぢきまらる。生年なまね五十四正治二年七月十四日
 出家しゅつが後ごに、同十六日同日よ往生じやうじやう後ご遂ついにられり。當あたり
 ちしき





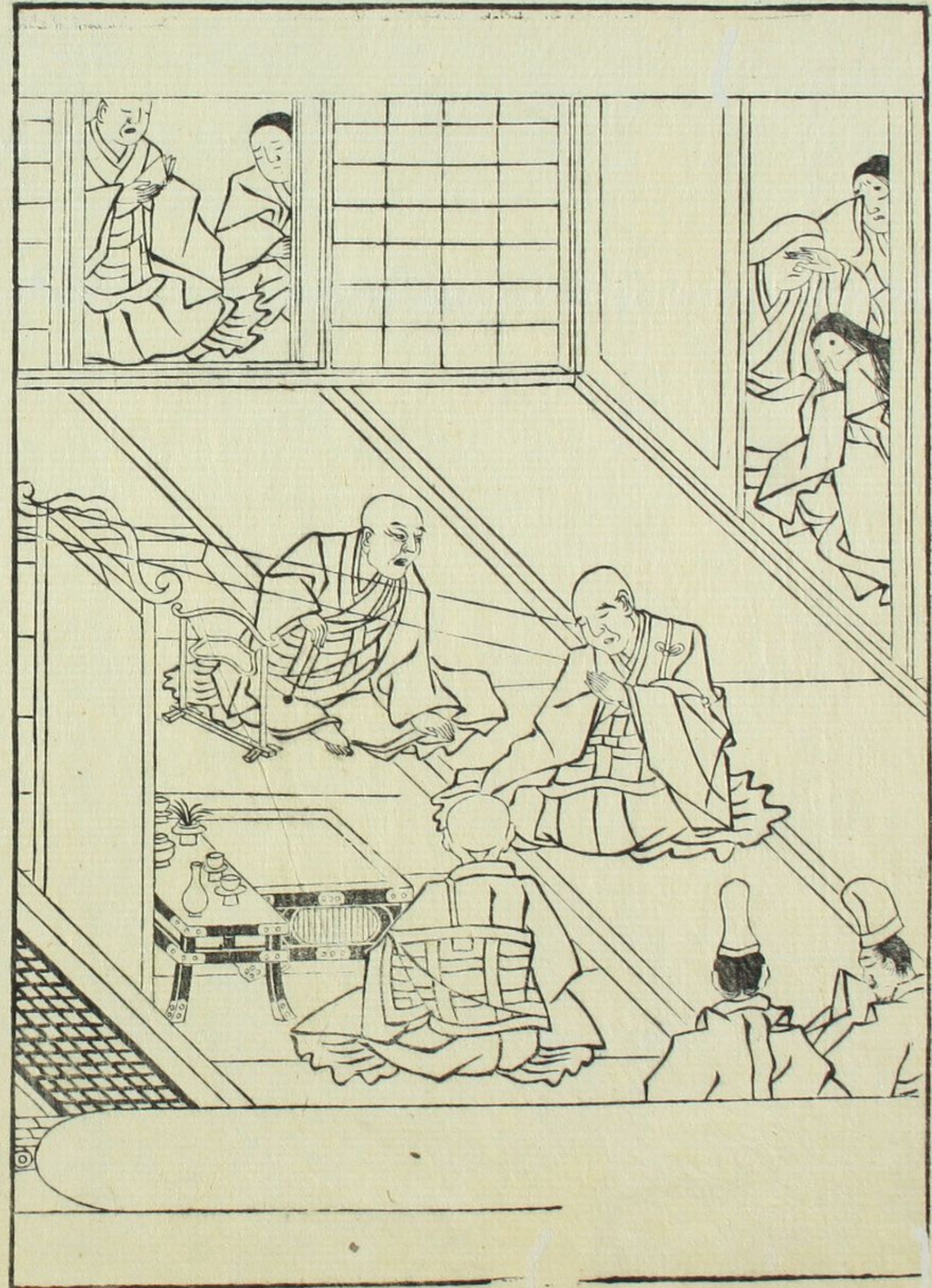
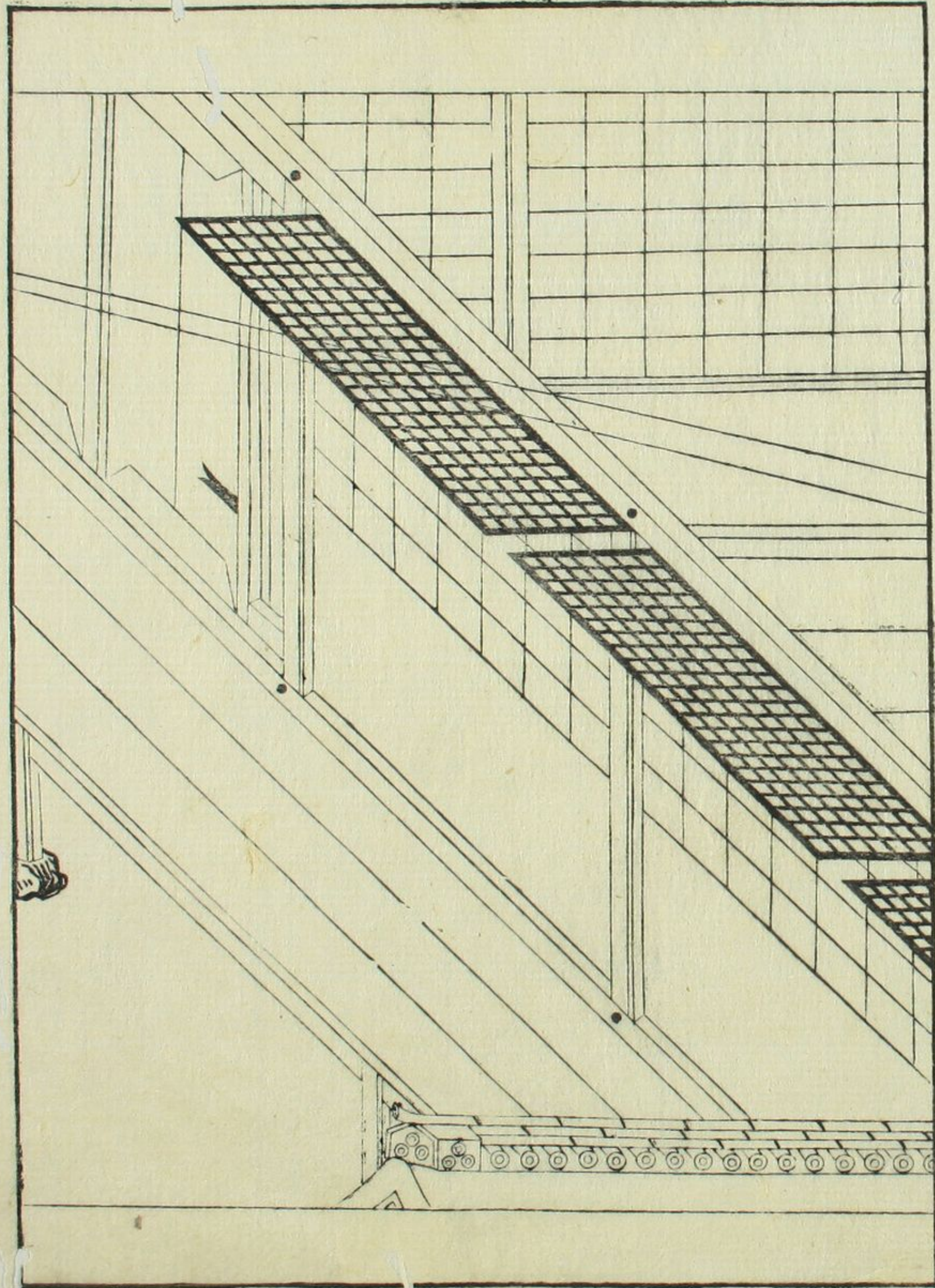
十一

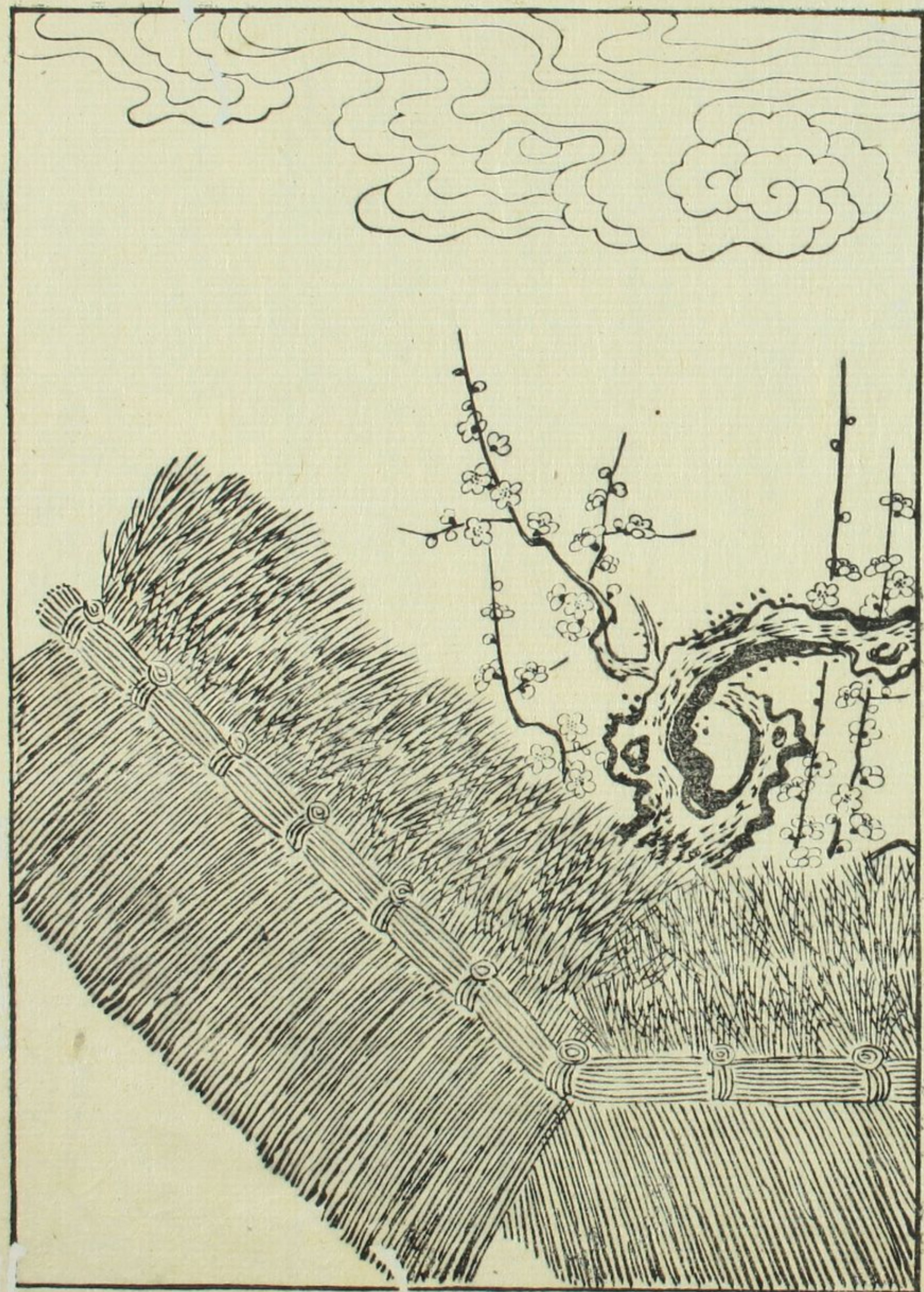


十二

右京權大寺隆信朝臣うきみやうのしんのといふく上人うしんは歸き。餘佛餘行
をあをいくたく弥陀の一尊あの先ひくは念佛
の一行をはらむはかは上人はあるひく建仁九年
は出家をすけ法名を戒心と号す一向專念の外他事
ならまけり生年六十四は春所勞危急をあふ上人
まらびて住蓮安樂二人の門才をはらうく知識を
すけよをらりにのとじよ二人の僧を左右
にをまてて病者と知識と同音よ念佛一來迎の讚

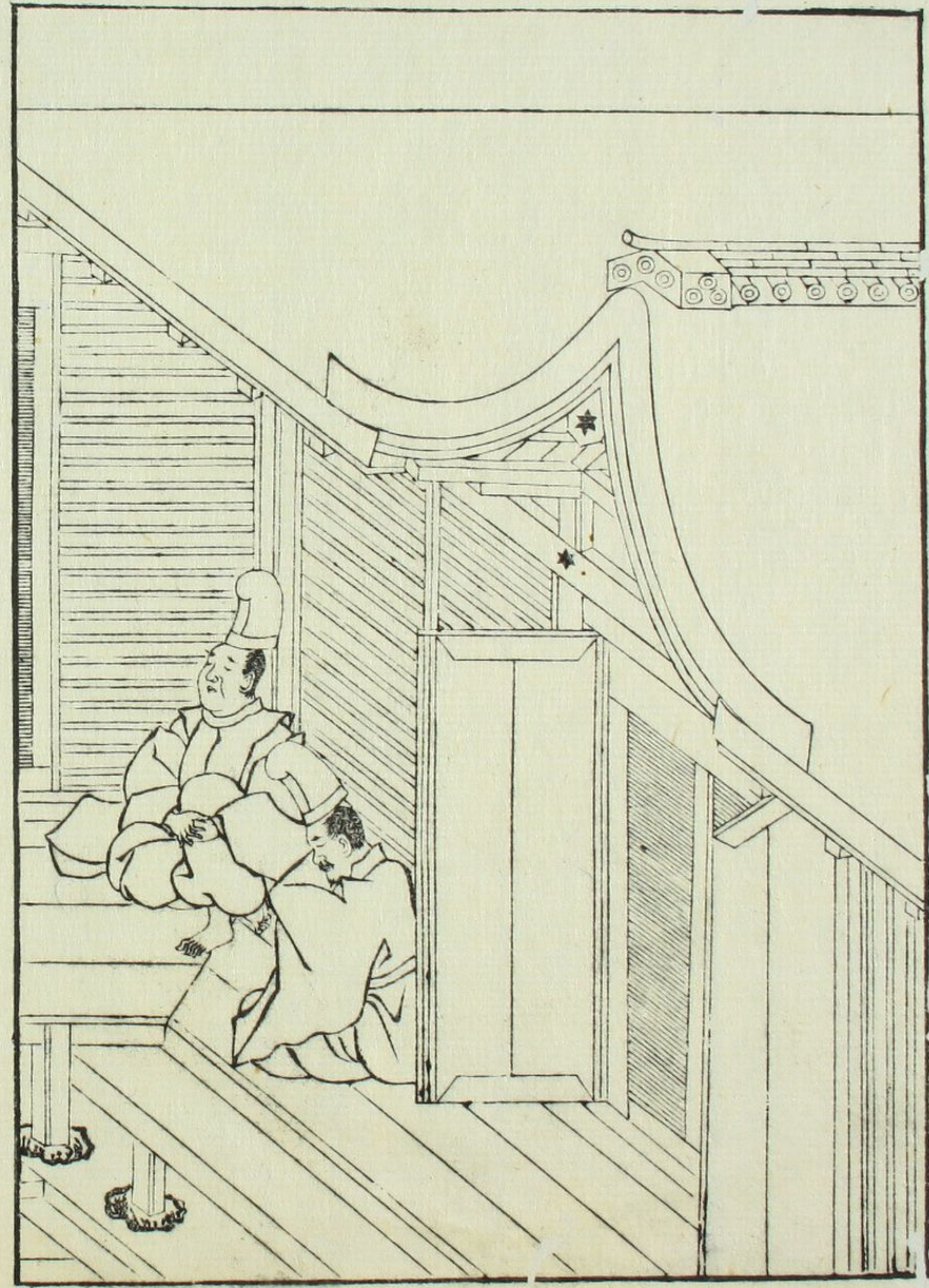
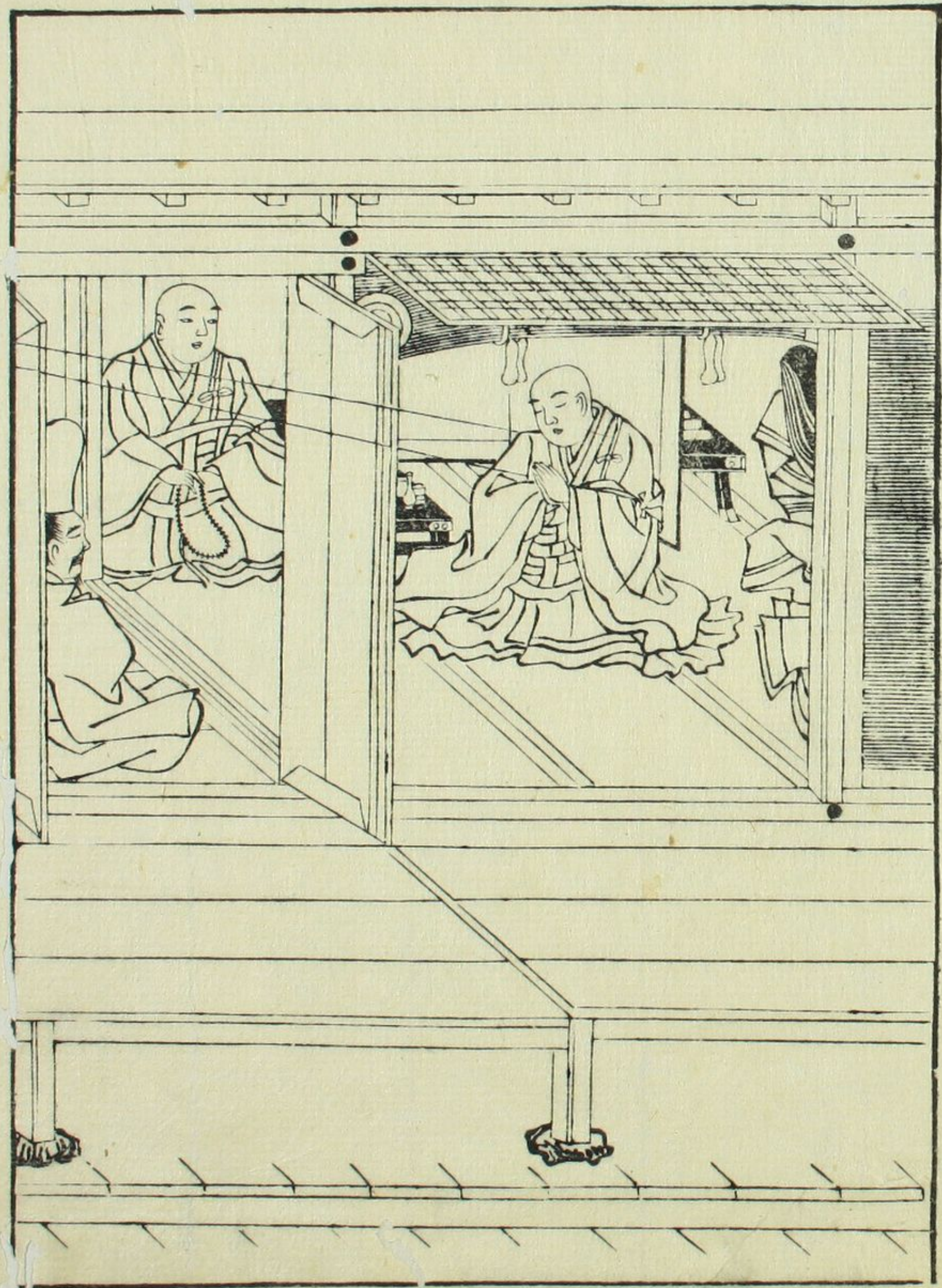
をとなへ端座合掌をく往生はらうく元久元年二月
廿二日なり紫雲音樂以下奇瑞一はある後は
正信房の墓所よ向く念佛一たまよ異香
かはらせれ日本往生傳よまらし入られるとなん

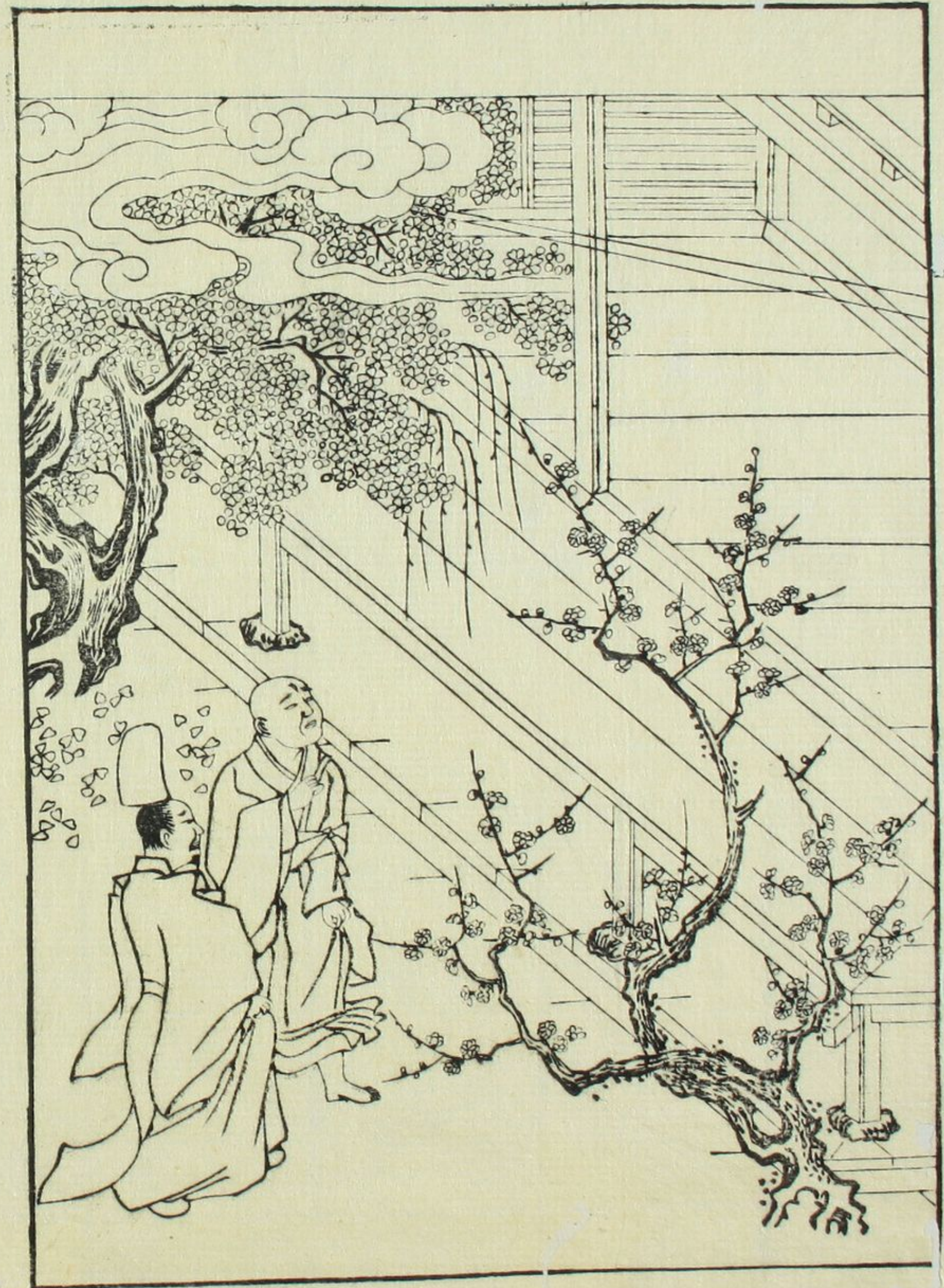




御二品の第民部御範光後鳥羽院の寵臣なり。ひ
とへよ上人よゆくと稱名れ外他事なりある。生年
五十四の春承元二年三月十五日よ出家をとりけ。法名
を静心と号と。病悩危急の由きこつめされたまひ。志
のひて御業のわらわ。後生れといふ思ひはるせん侍る
と。いふはあわされ。今度の往生決定してさう
よ頼めるところ俄に其故に去夜に夢よ一人の高
僧来り。誰人よまゝはととと問よ。我にれ源室なり。

唐王のつてい善導とたのき。此よりといふ源室といふ
此界に来て衆生をこらひく奉すてよ三箇度な
り。今汝よ命終の期を志あさんために来際と明
後日午に尅々の期なり。との言とえく夢よあたり
ぬすてよ冥の告よあつれ。往生むかへんか
らさる由紙存すと申と。是を聞食とれさうく御
随喜あわさる。件の日時とこつめをさうく正念よ
安住し。称名相續して往生候えく不思議な事なり。らわ





大宮内府實宗公 歸敬の心より他よりおひせり

ういほひに上人あつを謁して念佛往生あつをいせり

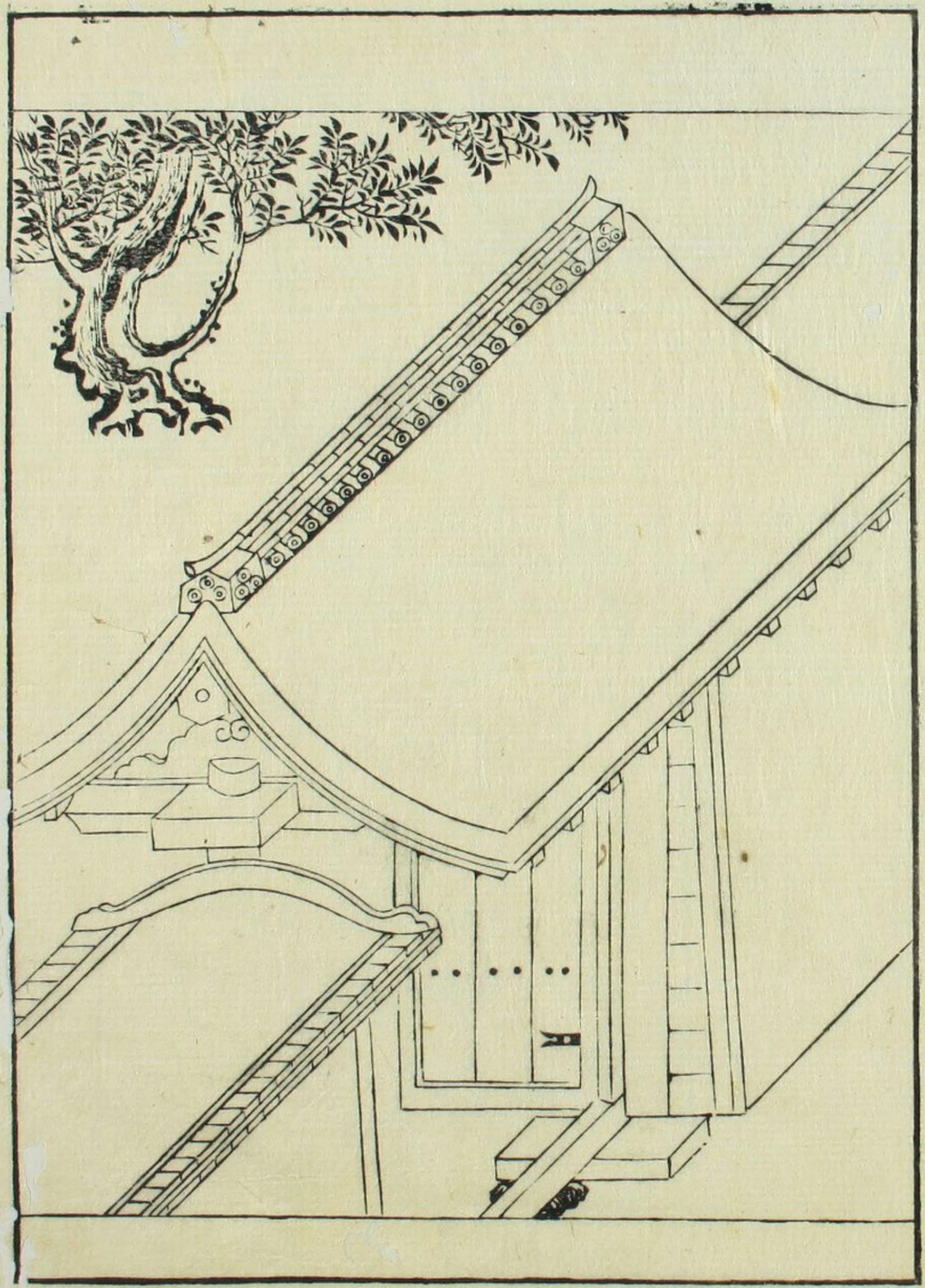
めはかに上人を和尚あつとて建永元年十一月二十

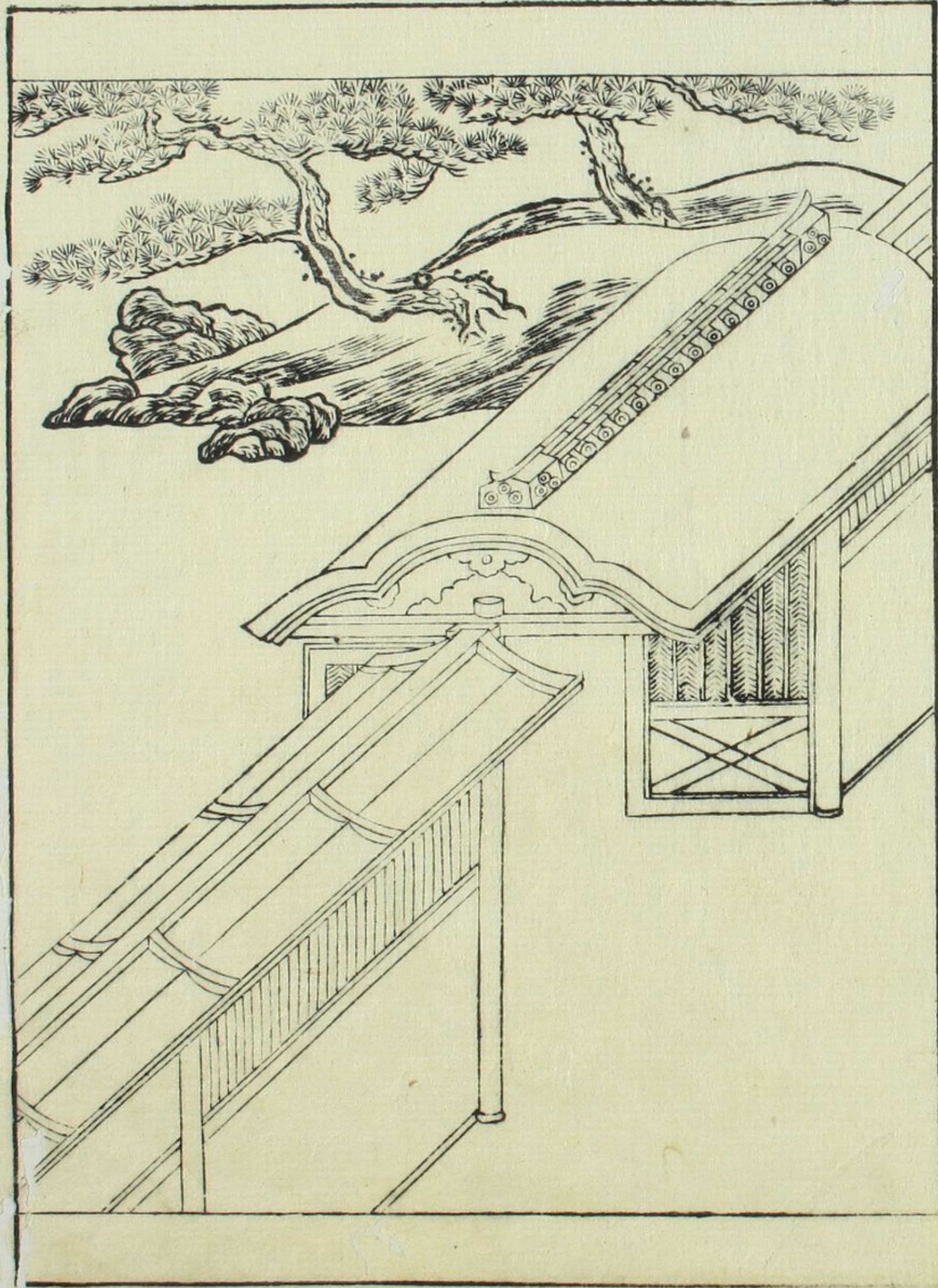
七日出家をせし専修あつ法あつをいせりたよに上人

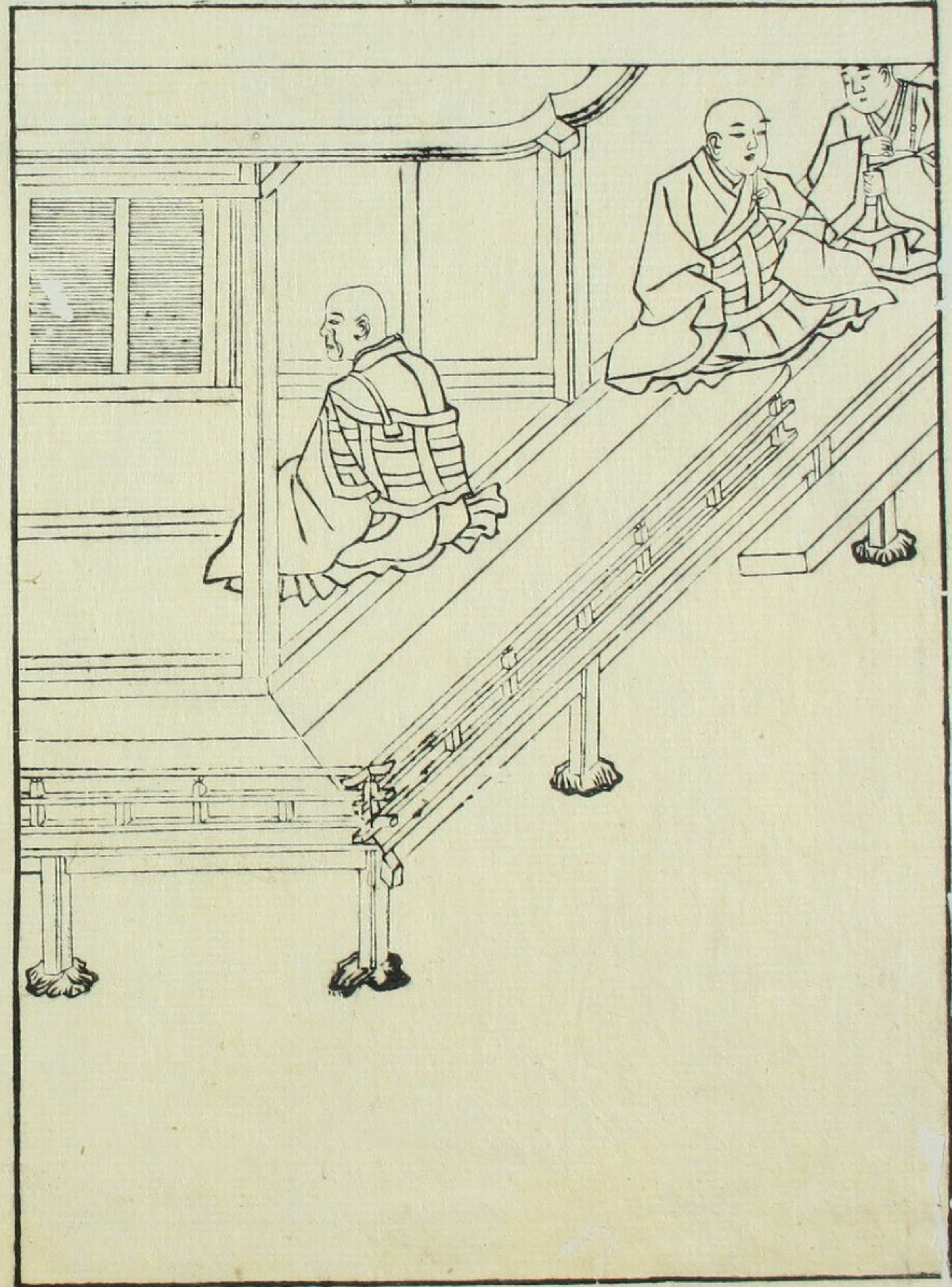
の入城あつをいせり初七日の諷誦あつをいせり

生年六十七建暦二年十二月八日正念あつの念佛

相續あつして往生あつをいせり

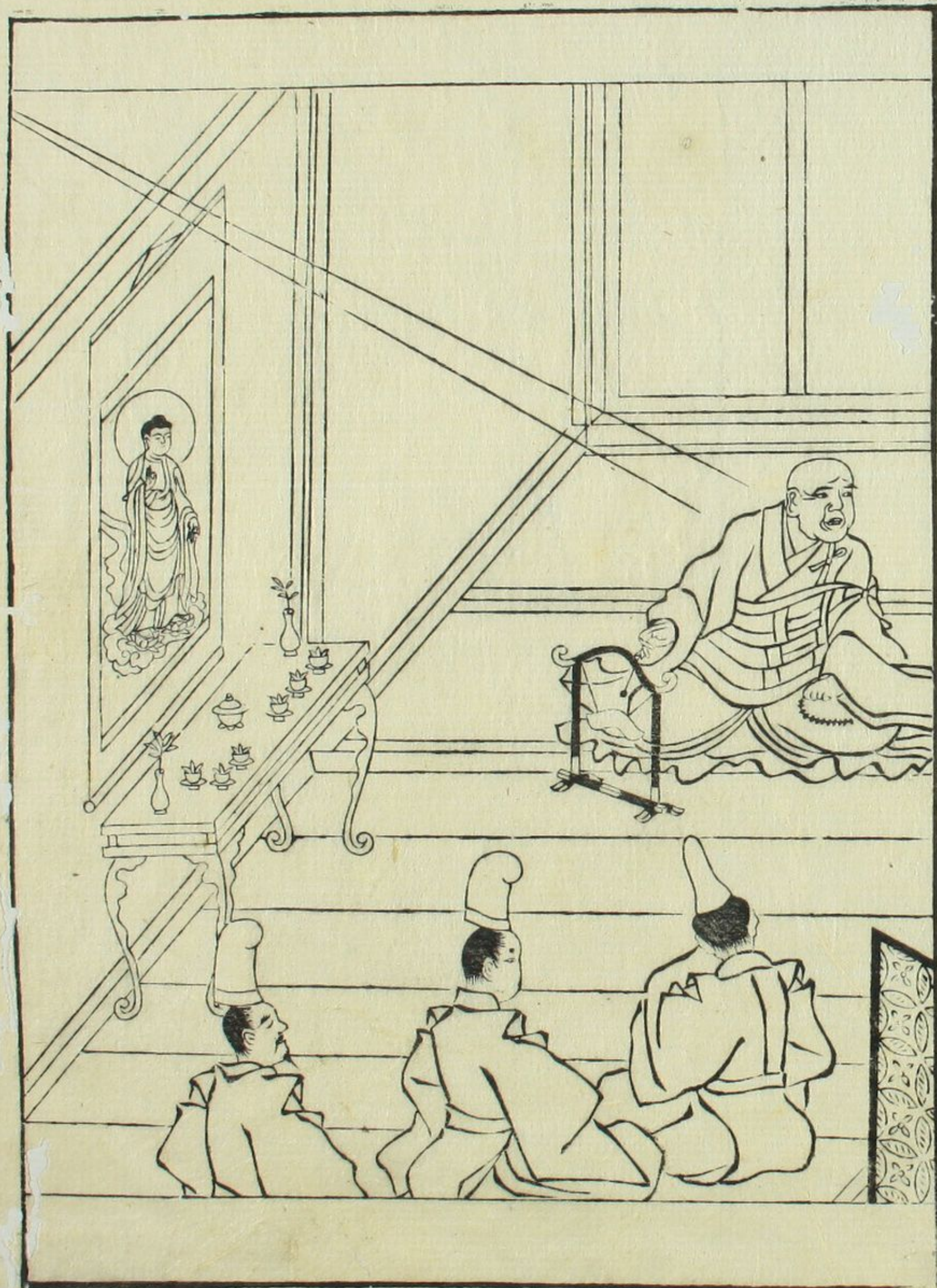






野宮ののみや左大臣さめいじん公こう継けいの師し茅ちの此こ契ちぎあささしは家いへり
よりに興こう福ふく寺じの衆しゆ後ご上人じやうじんの念佛にぶつ興こう行ぎやうをそひて
申まうて奏そう聞もんよ及および時とき上人じやうじんたうひよ弟子でし權ごん大だい納なつ
言こと公こう継けいを遠えん流りゅうせしる事こと由よし申まう状じやうをいれりといへ
とらに其その心こころをあはれし専せん修しゆ法はふを
あし事ことぬきし生なま年ねん五ご十二じふに嘉か祿ろく二年に正月しげつ廿に三日みか
は職しやくを辞しし同どうしき三十さんじゆ日にちは種しゆ々くの奇き瑞ずいを
りて往むか生ま成じやうげいまに末すえ代だいの羨せん談たんとわら強かたへり

すゆて月げつ御おん雲うん客かくれ中ちゆうり代だい導だうよ留とどまる人ひとおほ
を侍しやくりかしも志しあさしよりにてのき





世金也

